ジョブホッパーの魔導譚

フェアリーＰ

ファンタジア文庫

2973

ジョブホッパーの魔導譚

JOB HOPPER' S SORCERY SAGA

PRESENTS BY FAIRYP / ILLUSTRATION BY MAKIHITSUJI

Presents by fairyp / illustration by makihitsuji

Job hopper's sorcery saga

口絵・本文イラスト　巻羊

プロローグ

自分は気が付いたら、応接間の様な部屋にいて、ソファーに何故か座っていた。
別に呆けているとかそういうことは無い筈だけど……。
実際にソファーに座る前の記憶が無いので自信はないが、まだ呆ける歳でもない。
応接室風の室内を良く見てみると、室内にある机、ソファー、本棚、12体の男女の石像等の全てが人間が作り出したのかを疑うレベルで最高級品だと分かった。
『状況把握は済みましたか？』
『えっ？』
そして、目の前には誰もいなかった筈のソファーに、黒いパンツルックのスーツを着た絶世の美女が座っていた。
絶世の美女は、白い綺麗な肌に長めの黒髪、思わずじっと見てしまう程に深い漆黒の瞳、ソファーに座っていても分かるレベルのスタイルだった。
自分が想像する理想の美女を、更に上回った美女だった。
『ありがとう。あなたにそう言って貰えるのは嬉しいですよ』

『あれ？　自分は何も話してないのに……』
『ふふ。この部屋では私に分からない事は何もないのですよ』
　って事は話さなくてもテレパシーみたいに会話が出来るって事か？
『確かに話さなくても分かりますが、あなたの声を聞きたいので会話を楽しみましょう』
　絶世の美女は自分の事を昔から知っている友人と再会出来た事を喜ぶ様な笑顔を向けてくれた。いや、こんな美女と面識があれば絶対に忘れないだろうから、自分の思い過ごしだろう。
『それで、自分は何故ここにいるのかを知りたいのですが……』
『そうでしょうね。まずはあなたが疑問に思った事を聞いて下さい』
　絶世の美女は、疑問に思った事には全て答えてくれると言ってくれた。
　だから自分は思い付く限りの事を質問してみた。
　ここは何処なのか。何故、自分はここにいるのか。目の前にいる絶世の美女は誰なのか。質問している内に自分の事もノイズが入ったかの様に思い出せない事があった。
　そして、無理に思い出そうとすると、頭が割れるのではないかと思う程の頭痛が起きた。
『無理して思い出さないで下さい。魂に過度なストレスが発生しています』
　ストレス……自分はストレスを感じにくいのが取り得だった筈なのに……。

　しかし、思い出そうとするのを止めた途端に頭痛は嘘の様に消えていた。
『自分の聞きたい事はこの位かな』
『それは良かったわ。さっきも少し話しましたけど……』
　絶世の美女は自分にやって欲しい事があったらしく、いくつかのやって欲しい事を言われた。
『自分に出来る事ならば何でもやりたいと思いますが、自分で良いんですか？』
『あなたにしか出来ないと私は思っています。あなたには期待していますので頑張って下さいね』
『分かりました。出来る限りは頑張ってみます』
『ちなみに、転生するとここでの記憶はほとんど忘れてしまいます』
『えっ⁉　忘れるんですか！　ならやって欲しい事はっ？』
『忘れはしますが、深層心理には刻まれますから大丈夫です。次に会えるのを楽しみにしていますね、あなた』
『ちょ！　えええええっ⁉』

第1章　転生

自分は目が覚めると、目の前に見知らぬ天井が見えていた……。
某アニメのネタで言うのなら笑えるが、実際に目が覚めて知らない天井が見えたら、もの凄く怖い。
それにしても、此処は何処なんだろう？
確か寝る前の記憶では……。

自分は都内に拠点をおく建設の内装工事全般を請負う会社に勤めていた。
勤めていたと言っても、自分は入社してまだ半年位しか経っていないから本来なら半人前みたいなものだが、半年しか働いていないのに一人前になってしまう程の仕事量を毎日こなしていた。
昨日も確か都内に建設中の中層マンションで内装工事をやっていた筈だ。
その働いていた場所はいつもの様にマンションの内装仕上げ工事で、内覧会までの期間があと3日しかないという、既に修羅場モードに突入していた現場だった。

その為、会社の優しさ（？）により現場近くにアパートが用意されており、その部屋で数時間の仮眠をしていた。
まあ、通勤に使う時間があるなら馬車馬の様に働けよって意味でアパートが用意されている訳だが、終わらないよりはましだろうと思ってしまう辺りが、社畜精神が染み着いているのだろう……。
そして、自分の目の前に見える天井は、明らかにアパートとは違うものだった。
状況把握をする為に周りを見てみると、自分は木の柵があるベッドに寝かされてるみたいだった……というか、なんでベッドに柵があるんだ？
まるで自分が寝返りうってベッドから落ちないようにする為みたいだが、木の柵はかなりの高さがあった。
これは脱走防止か？
いや、こんな、木の柵なんて少し力を入れた体当たりで壊れそうだから違う気がするな。
寝ている部屋の全体像がよく分からないが、多分天井の広さから計算して部屋の広さは6畳間位だと思う。
しかし、この部屋の天井や壁には壁紙が貼っていないのでぼろ小屋に寝かされているのか？

ログハウスにしたって内壁の木材にコーティングがされている筈なのに、それすらされていないので素人が作った家か、廃墟……木は新しい感じがするので廃墟ではないか……。
謎だな。

自分のおかれている状況かまったく分からないから、とりあえずは起きて周辺の状況確認をしなくてはダメだな。
「あう？」（っ!?　あれ？）
自分は起き上がろうとしたのだが、身体がほとんど自由に動かなかった。
しかも、声までしっかりと発音する事が出来なかった。舌も動かしにくいし、って歯がない？
自分の身体に何が起きているんだ？
何とか動く自分の手をよく見てみると、赤ん坊のように小さい可愛らしい手だった。
「あう、あ～」（……これって、もしかしてあれだよな？）
もしかしてと思いながらも、部屋の周りを再度よく見ると、天井には今までの人生で見た事が無いタイプの照明（？）があった。
その照明（？）の中央部には色の付いた石が付いており、石と金属板が配線で繋がれて

いて金属板が光を放っていた。
しかし、その照明（？）がどういう原理で光ってるのかよく分からなかった。
明らかに地球には無い技術のような気がする。
まさかとは思うが状況確認の結果、これは最近仕事の無い日に良く読んでいるライトノベルなどで登場する異世界転生だったりするのではないだろうか？
……って、そんなことある訳が無いか。
それならまだ眠っている間に謎組織に拉致られたって方が現実味があるだろう。
しかし、自分の小さい手を見ながら考える。手は赤ん坊の様に小さいし、身体は自由に動かない……。
まず異世界に転生は無くても、確実に転生はしている気がする。しかも赤ん坊になってるみたいだけど、視界は良好だから生まれてから数ヶ月は経ってるかもしれないな。
転生している事を確信したと同時に、前世での死因や死亡場所が気になっていた。
転生したのなら確実に、前世では死んでるって事になるよな……。
そしたらアパートで過労かなにかで死んだのかな？
アパートなら現場には直接迷惑がかからないからセーフかな？
もし作業中に現場内で過労死とかしたら凄い迷惑だよな。

現場事故ゼロ運動してたのに過労死が出ていたら、一緒に頑張ってた同僚達に悪いなぁと考えていたのだが。

あれ……？

現場の人達の顔とか名前が思い出せない……。

そう言えば自分の名前も思い出せないぞ？

何の仕事をしていたかは覚えてるのに職場や家族、友人等の人物関係になると記憶がスッポリ抜けてる感じがする。記憶喪失になるとこんな感じなのかな？

しかし、激しい物忘れをしているみたいで気持ち悪いな……。

ガチャ

しばらく転生や記憶喪失の事を考えていると部屋のドアが開いた音がして、ひとりの女性が部屋に入って来た。人が入って来た驚きよりも、自分はその女性の容姿を見て凄くビックリした。

何故なら髪の色が凄かったからだ。

女性の髪色はコスプレイヤーが、アニメキャラに似せてかぶるカツラの様な、鮮やかで

綺麗な青色だった。室内が暗いから青く見えるだけで、外なら水色に見えているかもしれない。そして、顔の作りも日本人では無かった……。

分かりやすく言えば外国人のモデルみたいな彫りの深い顔だ。

しかし、不思議と鮮やかな青色の髪と顔が凄く馴染んでいた。

しかもスタイルも良く、背も高い気がする。こんなコスプレイヤーがいたら、自分はファンになっているに違いない。

あと、服装はなんと表現して良いのか分からないが、日本ではまず着てる人はいない様な服だった。

白くて綺麗なワンピースの様だが、少しキラキラしていたのだ。光沢のある素材という訳ではなく、周りがキラキラしている。適切な表現が難しいが、アニメ的なら天使が降臨したみたいなキラキラエフェクトが身体の周りに見える感じだ。

「○△×○×▲◇」

その美人女性は、聞いた事の無い言葉で自分に話しかけてきた。

知らない言葉を聞いて、前世で自分は英語もろくに喋れなかったから、この国の言葉を覚えられるかもの凄く不安になった……。

早めに言葉を覚えられるように頑張らないと生活すらまともに出来ない……。

そして突然、美人女性からの授乳タイムが始まった。
しかし、この女性が自分の母親かもしれないなと考えたら急に恥ずかしさはなくなった。
特に興奮することなく飲み始めるのだが、何故か飲んだ時に違和感を覚えていた。
まあ、母乳を飲んだ記憶なんて無いから、違和感があるのは当たり前だが、なんだ？

ミルク以外の何かが体内に……。

胃に入っていくミルクとは別に、身体全体へ何かが巡っていくのを感じ始めていた。例えるなら血管に異物感みたいなのが流れる感じだ。そんな違和感を覚えながら食事は終了した。
そして背中を叩かれる。
ゲフッ。
ミルクでは物足りないな……。
前世では小さい頃から食べるのが大好きだった。大人になってからは時間と引き換えに、お金の余裕が出来たのでコンビニの新作スイーツやニュース番組で特集したレストランや食べ放題の店に行ったりしていた。

料理の腕にも自信があったので、外で味を覚えては自宅で再現しようと料理していて、昔から暴飲暴食気味だったのでミルクでは量も質も物足りなかった。

成長したら好きな料理を作りたいな……。

この世界に調味料とか食材がしっかりあれば良いな～。

後は授乳の時に感じた、身体の中を流れていった異物感はなんだろう？

もし、ここが異世界だとしたらこれが魔力（？）かなとか、中二病的な事を考えながらニヤニヤしていたら、女性は手を自分に近付けたと思ったら突然光を放っていた。

そして、その光は自分の身体を包むように輝いた……。

輝きはすぐに消えるが、身体の表面をさっき感じた魔力（？）がモゾモゾしてる感じで、くすぐったい様な気持ち悪い様な、何とも言えない感じになるのだった。

この光を見て自分は異世界転生したんだなと思った……。

異世界転生したのなら、元オタクとしては魔法があるかもしれないと思って嬉しくなってきた。やはり、テンプレとしては子供の頃から魔力とか鍛えると魔力が増大して魔法無双とか出来るのかな？　とか、さっき感じた魔力（？）を自在に操れるようになるんだろうか？　とかそんな事を考えた。

しかし、まずはここの世界の言葉を覚えないといけないという現実を思い出し落ち込むのだった……。

授乳という前世では記憶に無い新鮮な体験をしたが、何とも味気ない食事だった。

そして、授乳が終わった後に母親（？）が自分に少し話しかけてきたが、何を言っているか理解出来なかった。

異世界転生なら通訳スキルみたいなのがあれば良かったのになと非常に思った。

しばらくしたら母親（？）が部屋から出て行った。

やっとひとりになれたな……。

今は部屋に自分しかいないので、やっとひとりでゆっくりと考える時間が出来ていた。

ここが異世界であり、転生したという夢みたいな現状をすんなり受け入れている自分がちょっと不思議ではあるけれど、多分考えても答えは出ない予感があった。

ならば現状を受け入れてから、これからの事を考えよう。前世で転職を繰り返していた時に身に付けた処世術である。

そして、異世界に転生したなら、やってみたい事、オタクとしてやらないといけないテンプレがいくつか有るのだが、まずは何からやっていくかを考える事にした。

まあ、それよりも先にこの世界で生きていく為には言葉の習得が必須だな……。
言葉を覚える方法は、赤ん坊の内に他人の会話を必死に聞きながら覚えればいいかなと思っている。というか、それしか方法が思い浮かばない。
後は、さっき母親（？）の手から出た魔力（？）を調べたいと思う。
手が輝いていたのを見ると、きっと魔法的なものが存在するのは間違いない。ならば赤ん坊の内から魔力を鍛えたら、将来には大魔法使いになっているかもしれない。

前世での自分は、引き籠もりではなかったが、休みの日や仕事終わりのほとんどの時間をネットゲームに費やすという、重度のネットゲームオタクだった。
魔法もそうだが、この世界にスキルやレベルとかがあったらゲームっぽくて嬉しいなと思う。
前世の筋トレみたいに、成長しているのか分からない状態でずっと鍛えるのは精神的に辛いので、是非ともレベルだけは最低限欲しいな……。
まあ、レベルがあったら異世界というよりゲームの中に囚われている可能性もあり得るのかな。
こういう時はゲームみたいに【ステータス画面】があればいいのになぁと考えた途端、

目の前に半透明な【ステータス画面】が出現した。
「あう、あ」（ビックリした！）

名前・レイ（０歳）
状態・良好　属性・雷　職種・無　種族・人族
成長スピード・力３　器用８　速さ３　知力８　魔力８
パッシブ・人見知り、建築、土木、料理、素材の極み
アクティブ・鑑定
固有スキル・ジョブホッパー、鑑定の魔眼

いろいろ内容にもツッコみたいところがあるけど、あったらいいなと思ったらステータス画面が本当に出てきてしまった。もしかして異世界ではなくて、ゲームの中に囚われている可能性もあるのか……？
しかし、ゲーム内なら０歳から始める必要性が無い……。
０歳から始めるネットゲームってどんだけリアル志向なんだよって思う。
いや、前世で超リアル志向のネットゲームはあったな。

もうゲーム内だとしても現実だと思って行動しよう。

まず、自分の名前がレイっていうみたいだけど、この世界はファミリーネームって無いのかな？

そして、何故か前世での自分の名前が思い出せない……。

逆にレイって名前の響きが馴染む。それと属性の雷ってどういう事だろう……？

もしかしたら、雷系の魔法やスキルでも使えるのかな？

雷と言えばなんか主人公っぽいし、後々にいろいろ試したいな。

あと、職種に関しては0歳児だから無職は当たり前かな。

どんな職種があるのかなぁ。

そして固有スキルの中身が謎だよな……。

ジョブホッパーと言えば、前世で転職を繰り返す人を指す言葉だった。確かに自分は前世で仕事を1～2年で転職していたから、たまに同僚からお前みたいなのはジョブホッパーって言うらしいと教えられた事があった。

そして、似たような言葉でキャリアアップってのもあったな。

キャリアアップは転職する度に高収入な職種になったりする言葉だから、ジョブホッパーの上位互換みたいなやつだと思う。

しかし、昔は転職を繰り返す人をジョブホッパーなんてそんなカッコいい呼び名では呼ばなかったから、ジョブホッパーなんて呼ぶのは最近の事だった。そもそも昔は転職を繰り返す人の印象が悪すぎたからな。

前世で、数多くの転職をしていた理由はいろいろあったけど、バブルがはじけて、建設業全体が不況になり、倒産や給与の未払い、ブラック労働などあって酷い環境だった事が大きかった。

その代わり転職の度に、やりたい職に就業していたので自分的にはジョブホッパーというよりも転職マスターの方がしっくり来るかもしれない。

あと、もうひとつの固有スキルである鑑定の魔眼にある鑑定はラノベ等に登場するチートスキルの定番じゃないだろうか？

鑑定スキルだけでも商売が出来て、この世界で生きていける気さえする。

魔眼って響きも中二病心をくすぐるワードである。

魔眼と言えば、さっきから気になっていた事が1つあるのだが、右眼と左眼で視力がかなり違う気がするんだよな……。

最初は赤ん坊だから見え方に差があるのかなと、都合の良い解釈をしていたが、やはり冷静に見比べてみると違う事が分かる。右眼の視力は近視なのか、視界がかなりぼやけて

いる。赤ん坊だから見え方が違うなら良いけど、生まれつきで目が悪かったら嫌だな。
そもそも、眼鏡のある世界かも分からないからな。
もし、眼鏡が無い世界なのに視力が悪かったら地獄だなと思う。眼鏡の作り方なんて知らないしな……。
この固有スキルというスキルは、前世での能力がかなり影響しているかもしれない。
鑑定に関しては、前世で家具や建材等の品質チェックは、常にしていた。
それに、一般人には言っても冗談にしか捉えてもらえず理解されなかったけど、自分は前世の時から人とは物の見え方が違ったりしていたんだよな。どう違うかというと、視界内にマス目の様な線が薄く見えていたのだ。これにより何も書いていない紙にも綺麗な線が引けたりしていた。
大人になってからは変な人だと思われたくないから言わなかったけど、ずっと視界内にある線が消える事はなかった。
最後に、パッシブスキルは完全に前世の影響が出ていた。
前世で、趣味として料理を作っていたし、土木と建築に関してはガッツリ仕事でやっていた事だ。人見知りは前世での性格だし、素材の極みはいろんな素材を集めるコレクターだったからな……金属や石、紙、木など気に入った物があれば何でも集めていたからな。

というか、人見知りってスキルなのか？
あまりプラスにならない感じのスキルだけど……。
パッシブとは多分、常時発動しているスキルの事なんだよな……。
もしかしたらプラスになるスキルばかりではなく、マイナス効果のスキルも結構あるのかもしれない。
成長スピードのステータスは生産系や魔法系向きなのかもしれないが、力と速さが低いって事は、戦闘には向いてないんだろうな。前世でやってきた事は運動するよりも室内で何かを作ったりするのが好きだったから、自分はこの異世界でも生産系が向いているかもしれない。
まだ将来の事を考える時間はたくさん有るから、後回しで良いかな。
まずは魔法やスキルなどを考えないとな。
自分はステータス画面を見ながら、スキルなどの確認を一通りやり、今後の予定を考えていた。
確認が終わった時には、何故か急激な眠気に襲われていた。自分は知らぬ間に眠りについていたみたいだった……。

確か乳児期は眠る時間が長いんだっけかな？

乳児期は寝て起きての繰り返しで、間隔が短いとか昔、学校で勉強した気もするけど、ほとんど覚えていなかった。前世では育児などしたことがないから子供については、あまり分からないんだよな。寝ている間に成長するとかも言われていたから出来るだけ眠い時は寝るようにしようかな。大人になってから背が低いのはちょっと嫌だし。

そう言えば、母親（？）の髪色は綺麗な青だったけど、自分の髪色も青いのかな？

容姿もどうなるか分からないから、今から考えても無駄ではあるけど、出来れば母親（？）みたいな髪色は避けたいな……。

何だかコスプレしているみたいで恥ずかしい。

ステータス画面の確認をしてからどの位の時間を寝ていたかは分からないが、母親（？）から受けた光の感覚を忘れない内に魔力（？）の確認をしたいと思う。自分的には魔法が使えるかどうかの確認はかなり重要なファクターである。

自分は母親（？）からの光で感じた時の魔力（？）がどんなだったかを再度思い出してみようかと思ったが、その前に授乳してもらった時に感じた異物感みたいなものが何なのかを考えるのが先かな……？

何故かは分からないが、異物感の解明こそが最優先だよと言われているかの様な気がした。

確か母親（？）から授乳してもらっていた時にミルク以外で何かが体内を流れるのを感じた異物感は、口から取り込んでいたはずなのに、胃の中に流れていると言うよりは血管内に流れている感じがしたんだよな……。

前世では感じた事の無い異物感ではあるが、元々人間は口から食べたものをエネルギーに変えているのだから、この血液内に流れる感じのものが魔力（？）だとしたら、どうだろう？

摂取したミルク内にある魔力（？）は自動的に血液へと吸収されるのではないだろうか？

うん、我ながら良い推理だと思うので、この仮定で調べていこう。

まずは、自分の血管内に魔力（？）が流れているのを感じ取れないかを試したいな……。

自分は目をつぶり、体内に流れているであろう血液に意識を集中する。

目をつぶって集中していると、うっかり寝ちゃいそうになるな。

集中、集中……。

眠い……。

それから体感で10分ほど血液から魔力（？）を感じる作業をしていたが、全く感じられずにいた……ステータス画面が簡単に出てきたのもあって、ちょっとやれば多少の成果が出るかなと思ったけど、そう簡単にはいかないらしい。

そもそも、前世の時から血液の流れなんかを感じ取ろうなんて考えたことないから、やったことのないものを新たに感じ取ろうというのが難しい。

体中を流れている血液を感じろ、しかも血液中に流れる何かを感じろと言われても無理な話である。

しかし、諦めたらそれまでなので、根気強く続けてみる事にした。

某バスケ漫画の監督も言っていたからな、諦めたらそこで終了だと……。

自分は更に数時間、血液に意識を集中する作業をしていた。その間、何度か寝落ちしたが目をつぶっているから寝てしまうのは仕方ない。

それから数時間も頑張ったかいがあり、微かではあるが変化を感じ取れた。

心臓の近くに温かい何かを感じるのだ。それが全身に微量だけど流れている何か……これが魔力（？）なのかな。やはり心臓には大量の血液が流れているから、血液中の何かを感じ取るなら心臓に意識を集中するのが正解みたいだ。

そして、魔力（？）を感じ取れたら次のステップだ。

今度は母親（？）みたいに手から光を出したいから、魔力（？）を指先に集まる様にしてみたい。心臓から肩、腕、手、指先の順に魔力（？）が集まっているイメージをしてみる。

そして、この作業が魔力（？）を感じるよりも更に難しかった。心臓辺りから肩までは流れているのを感じるけど、腕から先は急に魔力（？）量が少なくなるのか、霧散していく様な感じになり、急に魔力（？）を感じられなくなる。

しかし、魔法を使える様になるまでは是非とも頑張りたい。どうせ赤ん坊の間は寝てるかミルクを飲むしかやる事がないからな。

この作業は必ず毎日続けてみようと心に誓うのだった。

それから体感で数日が経過していた……

そして、また新たな変化が訪れた。

それは、指先に僅かだが魔力（？）を集められる様になった時のこと。うっすらとだけど大気中に霧の様なものが見える様になったのだ。

今までに見えなかったものが見えるようになる変化には赤ん坊ながら興奮して叫んでしまった。

まあ、赤ん坊だからギャーギャーと泣いているだけだが、その叫んだせいで普段は聖母の様な微笑みをする母親（？）が血相を変えて部屋に入って来た。

そして、母親（？）は自分の身体をいろいろ調べたりしていた。

普段というか、意識が目覚めてからほとんど叫んだ事が無いことを思い出し、母親（？）の慌て具合に合点がいく。今まで泣いたことが無い赤ん坊が突然泣き出せば慌てるだろう。ちょっと申し訳ないなと思ってしまった。

その事は良いとして、霧の様なものが最初は幻かな（？）って位に薄かったのに、毎日意識をして見る練習をするにつれて、次第に霧状のものがよく見えるようになっていた。これが魔力（？）だとするなら、魔力（？）は大気中にもあることになる。

そしたらミルクから感じた異物感が空気中にもあることになるのだが、呼吸していてもミルクみたいに異物感は無かった。

この時点で覚醒してから何日が経過していたか分からないけど、日々少しずつだが上達している様な気がしていて、徐々に成果が出ているようで楽しかった。

授乳のミルクを飲んだ時に体内へ流れる異物感を感じる事も上達に役だってくれていた。

それから更に何日かが経過した時。突然、頭の中に女性のものとも思える中性的な声でアナウンスが流れ出した。

【魔力操作を取得しました】

まさか脳内にアナウンスが流れるとは思わなかったから、かなりビックリした。何かスキルの覚え方が某ゲームみたいだな……。本格的にゲームの中なのではないかという疑惑すらちょっとでてきていた。それは良いとして、やっと魔力操作というアクティブスキルを取得する事が出来た。この努力をしてスキルを取得するという達成感は癖になりそうだなと思った。

それから魔力操作を使いながら、指先に魔力（？）を集中する様にしていたら、魔力感知のアクティブスキルも取得する事が出来た。

この世界のスキルは、覚えると使えなかったスキルがいきなり使える様になるのではなく、コツを掴んだ感じで、難しい操作等が無意識に簡単に出来るようになる感じだった。

魔力操作もスキル取得前は目をつぶり集中していたが、スキルがあると目を開けながらでも魔力を感じる事が出来て便利だった。多分、スキルを覚えた後も使い続けることで上

達していく気がしたので、引き続き同じ練習は継続する事にした。

スキルに魔力操作や魔力感知って文字があるから魔力（？）と思っていたものは魔力で間違いないという事が分かった。

ここで少し違和感があったのだが、今まで魔力（？）と自信が無い時から魔力と確信した瞬間、脳が何かに接続されたのではないかと感じていた。漠然とそう感じただけだから、もしかしたら勘違いかもしれないが、この世界は魔力といい前世の世界とは違うシステムが働いているのかもしれない。

魔力操作を取得して1日が経過したのだが、自分は異世界テンプレ的な魔力を使い切ったら魔力量が増えるかどうかを試したいと思い、ひたすら魔力操作していたが魔力が増えている感じはしなかった。

どちらかというと、母親（？）のミルクを飲んでいる時の方が魔力量が上がっているかもしれない。この辺は、感覚みたいなレベルだから独学では詳しくは分からなかった。

前世の感覚で、分からない事はすぐネットの攻略サイトで調べたい衝動に駆られていた。何でもすぐネットで調べるのも良くないと言われていたが、異世界に転生してネットの偉大さを数週間もしないで実感したのだった。

自分は赤ん坊なのでずっとベッドの上で生活しているのだが、自分がずっと生活しているこのベッドのある部屋は寝室らしく、夜になると母親（？）と毎日一緒に寝ていた。

しかし、自分が自我に目覚めてから父親っぽい人を未だに見た事が無かった。というか、この世界では母親（？）しか見ていない。まあ、この世界に自分と母親（？）しかいないって事は無いだろうから父親がいるか、父親無しのシングルマザーなんだろうか？

でも母親（？）は自分が見ている感じではほとんどの時間を家の中で生活しており、働いている感じもしない。もし、父親がいたとしても何日も帰って来ない仕事ってブラック企業だよな。大丈夫かな？　この世界は……。

自分はせっかくファンタジーなこの世界に転生したのだから、自由に楽しみながら、のんびり暮らしたいなと思った。

自分が魔力操作と魔力感知というスキルを覚えてから、既に数日が経過していた。

魔力操作と魔力感知を覚えた時に、霧の様なものがうっすらと見えていたから、これは鑑定スキルによる効果なのかと思っていたら、どうも違ったみたいだった。何故なら鑑定を使うと、それとは別に鑑定っぽい効果が表れたからだ。

そして鑑定のスキルを少し使ってみたけど、スキルの効果が微妙だったので、凄くショ

ックを受けていた。

まさか鑑定があんなものだったとは……。

例えば壁や天井を鑑定してみた結果は。

壁はオウル樹を加工して作った建材の壁。天井はオウル樹を加工して作った建材の天井としか表示されなかったのだ。オウル樹というのがどんな感じの物かは分からないが、ファンタジー感の無いものでがっかりした。

イメージ的にはもっと細かい内容が分かるのかなと思っていたのだ、例えば樹齢とか産地とか。せっかくだから鑑定でしか分からない内容が分かる様になりたかったな。

もしかしたら鑑定スキルにレベルみたいな、ステータス画面には表示されない隠しレベルがあるのかもしれないとポジティブに考える事にした。

むしろそうであって欲しいという願望ではあるのだけど。

そして母親（？）を鑑定したらソフィアと名前だけが表示されたので、たぶん母親（？）の名前だと思う。しかし、壁とかを鑑定したらオウル樹とか出たのに、人物は名前しか分からないんだな……。

前世は個人情報とかうるさかったから、営業職とかなら鑑定で名前が分かるだけでも便

利かもしれないが、ちょっと微妙だなぁと考えていたら、後ろを向いていた母親（？）が突然振り返った。

母親（？）の振り返った時の雰囲気は、いつもニコニコしていた表現とは異なり周囲をキョロキョロと警戒しだしたのだ。母親（？）はしばらく周囲を警戒していたが自分の顔を見るなり、何かに気が付いたのか、いつもの笑顔に戻っていた。

もしかしたら鑑定をした事により、母親（？）は誰かから攻撃みたいな事をされたのではないかと警戒したのかもしれないな。そして、その原因が自分だと分かり笑顔に戻ったと……。

そうすると、自分に赤ん坊にはない知性があるとバレてしまった可能性もあるかもしれない。今後は完全に赤ん坊のフリをして、鑑定スキルを使ったのはたまたまでしたって設定にしよう。

０歳児が突然鑑定スキルを使っていたら、ホラー映画みたいだからな。

そうなると相手に使用したのがバレるのかもしれない鑑定スキルの評価は更に降下していった。今後は無差別に鑑定スキルを使うのはなるべく控えるようにしようと思った。

この世界で目覚めてから出会った人物はソフィアという女性だけだし、授乳もしてくれ

ているので、この人が自分の母親だというのはほぼ確定だったのだが、どうしても前世で38歳独身だった中身おっさんとしては、ソフィアの様に若くて綺麗でモデルみたいな年下の女性を現実的に母親とは思えず、しっくり来なかった。

しかし、授乳時のミルクを飲む作業や胸を見るのにはほとんど抵抗が無くなって来たので、それと同じ様に、そのうちソフィアの美しさにも慣れて母親だと自覚するんだろうか？

あと鑑定スキルは右眼を開いてないと発動しない事が分かってきた。これはきっとステータス画面に鑑定の魔眼とあるから、魔眼の方で見ないと駄目だという事なのだろう。

ますます魔眼が中二病みたいな感じになって来たと思う。そのうち変なポーズを決めて、クックックとか笑い出さないだろうか不安だ……。

昔の病気が発動してしまいそうだと思ったが、スキルなどがある世界だから、ポーズを決めながらスキルを発動させても違和感が無くなり、そういうのもありなのかな？　とも思ってしまった。

この世界の事を知る為に、まずは母親をしっかりと観察する事にした。あと母親は自分がじっーと見ていると嬉しいのか、スキンシップが激しくなる傾向があった。

そして魔眼だからか右眼に魔力を集中させると、魔力操作の時に見えていた霧の正体が

魔力の流れだという事が分かってきていた。

鑑定の魔眼には魔力を見る能力と、鑑定をする能力の2つがあることが分かったのだ。

魔力の流れは霧のような感じで、下からゆらゆら上がって来るみたいだった。まるでお化け屋敷の演出みたいでちょっと怖かった。

あと、魔力は魔力感知をする事は出来ても鑑定をする事は出来なかった。その辺はレベルが足りないのか、物質みたいなのしか鑑定が出来ないのかは不明だったが、もう少し鑑定さんは万能さを出してくれても良い気がする。

よく読んでいた王道ラノベなら鑑定スキルはほとんどが凄いスキルなのだから……。

このままだと鑑定の魔眼ではなくて魔力が見えるただの魔眼に成り下がってしまいそうだ。だけど、もし魔眼にもレベルがあり、魔眼を使い続けたら性能が上がるかもしれない、だから暇があれば魔眼を発動させておこうかな？

心配な点は魔眼を使いすぎると、失明するとか無いのだろうかという事だった。

それから数日が経過した頃。

自分は暇さえあれば鑑定の魔眼を発動させていた。鑑定を発動させると言っても、自分が自由に見られる視界はベッドの上からだけなので、基本的には壁や天井と同じものをひ

たすら鑑定していた。暇な赤ん坊の時でしかやろうとは思わないような、完全なる作業だった。

そして、魔力を見たり鑑定を使い周囲の物を調べまくっていたら、遂に鑑定さんがレベルアップしていた。まあ、レベルアップと言ってもゲームみたいに音が鳴ったりするわけではなかった。

その鑑定のレベルアップした効果は……。

壁　オウル木材　オウル樹を……という項目が一つ増えたのだった。

しかし、これによりスキルにはステータス画面に表示されないレベルみたいな何かがある可能性が出てきたので、なんでも使い続けたら上手になるのかもしれない。こういうスキル上げみたいなものは、元ゲーム好きの自分としては上がると分かれば地味で同じ作業の繰り返しも楽しくなってくるものだった。

まだ身体の中で動かせるのが、手と足を少し位動かせる程度なので、今のうちに魔力操作や魔力感知、鑑定を使いこなしたいと思っていた。

数日前までは鑑定を悪く言っていたが、能力が向上すると分かれば話は変わってくる。鑑定と言えば異世界テンプレ的にチートなスキルだから、どこまで項目が増えるか楽しみだった。

あと魔力操作に関しては、まだ手のひら辺りに微量な魔力を集めるだけで集中が切れてしまい、魔力が霧散してしまう状況だった。赤ん坊だから集中力が無いのかは分からなかったが根気よく続けたいと思う。

魔力操作は鑑定みたいな眼に魔力を集中するだけで発動する、お手軽なスキルとは違い魔力に意識を集中しながら移動させたりとやる作業が多いスキルで難易度はかなり高いと思った。

自分はこの世界に転生してからまだ数週間しか経過してないけど、寝てるとき以外はずっと何かのスキルを使用していた。

しかし、よくある魔力切れを起こしたら気絶とかして大騒ぎになるみたいなイベントには一度も遭遇してない。これは魔力量が生まれ付き膨大とか、スキルは魔力を使わないのどちらかなと推測しているが、魔力を使わないのなら何とかして消費して、出来ることなら赤ん坊の内に魔力の総量を底上げしたいと考えていた。もしかしたら定番の赤ん坊の方が成長率は高いかもしれないからな。可能性は低いかもしれないけど、せっかくのファンタジーなのだから定番のテンプレは消化していきたいと思っている。

あと、魔力の消費方法の可能性としては、母親がよく自分にしてくれる手を光らせている行為が魔力を消費する魔法である可能性が高いとも考えていた。

そこで自分は良いことを思いついた。魔力感知を使い、意識を集中すれば魔力の使い方がわからないかな？

いや、もしかしたら魔力操作が一番の近道か？

スキルはレベルとか経験値みたいに数字で表示されないからゲーマーとしては達成感が非常に薄い。前世ではゲームで分からないことはネットで調べればすぐに答えを出してくれていたが、今の現状では調べる事は出来ない。

もしかしたら、うちが貧乏なだけでネットも魔法も両方が普及している理想的な未来の世界って可能性も捨てきれないが、確認のしようがないからな。ネットで調べる事に慣れ過ぎている自分としては、このままの訓練方法で正解なのかと、迷いや焦りがあった。

魔力感知を発動させつつ母親が魔法を使用するのを見続けながら思考する事、数日が経過して……

まず、この光る魔法は何を目的にしているかを考える事にした。食事前にすることと言えば、衛生面の確保ではないだろうかと予想した。雑菌を除去もしくは殺菌する魔法があるならば、身体が光ったときに皮膚の表面がゾワゾワする効果にも納得がいく気がする。むしろそれしかないのではないだろうか？

自分は母親が使用している魔法は殺菌する為のモノだと仮定して、不潔な菌を殺すイメージをしながら魔力操作を使い、魔力を手のひらに集める練習をしていた。菌を殺すといっても、完全に殺してしまうと耐性の低い身体になりそうだから、殺すイメージは前世で勉強した食中毒の原因になりそうなものに限定にした。

イメージを明確にしてから母親の魔法を見たり、練習する事、数時間が経過した時に脳内アナウンスが流れた。

【クリーンを感知しました】

【クリーンを取得しました】

おおっ!!

何かクリーンとかいうのを取得したってアナウンスがしたぞ？

未だにこの機械音声なのか女性の声なのか分からないアナウンスは謎だけど、この件に関しては悩んでも解決しない気がしたので後回しにする事にした。

それにしても殺菌をしたいと思いながら魔力操作をしていたとはいえ、クリーンって……。

名前からして清潔にしてくれる魔法っぽいな。というか、使い道が殺菌位にしか使えない気がする。

でも、衛生面の知識がどこまで普及しているか不明な異世界で、食中毒などで死ぬ可能性が減った事は大きい気がした。せっかくのファンタジー世界なのに、死因が食中毒とか笑えない。

殺菌をイメージしてクリーンって魔法を取得したから、毒を殺すイメージをしてみたら解毒作用のある魔法も取得出来るのかな？

もしくは、クリーンを感知したとあったから、魔法を魔力感知で感知さえ出来れば魔法を覚えられるのかもしれない。クリーンの魔法効果と使い方は何となくではあるが取得した時に分かる様になっていた。

よくある魔法の詠唱もいらないし、やることはイメージしながら魔力操作をする延長みたいな感じかな……。

クリーンのやり方は、体内の魔力を操って手のひらに集め、展開してから魔法効果と殺菌したい菌や汚れのイメージと共に魔力を体外に出す感じだった。

殺菌したいものは目に見えないからイメージが難しいが、汚れに関しては目に見えるレベルのものを落とせるならクリーンの実用性はかなり高いのではないだろうか？

前世でクリーンさえあれば、それだけで食べていけそうな気がする。菌さえなければ放置した生肉や生魚、生卵だって食えるって事だからな。この魔法が一般的に普及しているのかは、成長したら優先的に調べよう。

ちなみに、自分なりの魔力を手のひらに展開する方法は、手のひらに粘土で物を作るみたいなイメージでいけた。これは魔力が普段は霧状だけど、密度を上げると粘土やゼリーみたいに変化するからだ。

クリーンを使用する時は霧状の密度でも発動するみたいだから、イメージ以外は簡単で初心者向けの魔法だと思った。

この魔法システムが何となくだが分かった時は、魔法無双も将来的に出来るのではないかと夢を膨らませていた。何故なら前世で、インテリアデザインもやっていたからイメージする事に関しては得意だし、趣味でフィギュアとか作るのも昔から得意だったので、この世界の魔法は自分にとって得意な事だらけだったからだ。

このクリーンの魔法をせっかく取得したのだからすぐにでも使ってみたかったけど、まだ母親が目の前にいるので使うのは躊躇われた。流石に0歳児が親の目の前で手を光らせながら魔法を使いだしたらいろいろとまずいと思うので、母親が部屋から出て行ったら早速クリーンの魔法を使ってみようと思った。

【ソフィア】

私はレイを産んでから、レイを見ながら優しい気持ちになるこの生活がとても好きだった。少し前まで、旦那のレオンや他の仲間達と一緒にパーティーを組み、グラン王国をメインの拠点とした冒険者として活動をしていた。

だけど、私はレオンとの間に子供が出来た事をきっかけに冒険者から引退する事を決意した。脱退する事は、他のパーティーメンバーに本当に申し訳ないと思ったけど、みんな笑顔で祝福してくれた。私の他にいたもうひとりの女性メンバーからは、結婚と妊娠のダブルで先を越されたとがっかりしていたっけ。彼女は美人だけど、魔法使いとして強すぎるので、彼女に釣り合う男性となるとグラン王国内ではかなり限られている上にほとんど結婚しているから難しいかもしれない。

引退してからは冒険者時代にパーティーの拠点にしていたグラン王国内にある冒険者の街・スカウトフォードから馬車で2日位の距離にある田舎町・モロットに引っ越してきていた。

このモロットの町は人口も少なく特に目立った特産品は無いが、のどかなところにあり、

大きな街と街の中間にある宿場町として、適度に人の流れがあるところが気に入って引っ越してきた。冒険者をしていたのにあれだけど、息子には穏やかな町で自由に成長して欲しいと思っていた。

現在、私が住んでいる家は中古物件だったが、元々の家主がそこそこ稼いでいた冒険者で、一時的な仮住まいの為に建てたらしいが、直ぐに中央地域に移動する事になったので手放した、新築に近い優良物件だった。家の造り自体は、急造らしくてシンプルな間取りだけど、庭が広くて、ほとんど新築だから綺麗で値段もかなり安かったので気に入って即決で一括購入をした。

本当は旦那のレオンには、一緒にレイを育てて欲しかったけど、子供の為にもレオンにはまだいっぱい稼いでもらわないといけなかったので、別々に生活していた。

レオンのパーティーは私が抜けても人員補充はせずにまだ同じ仲間だけで冒険者として依頼をこなしていた。なんでも、私が復帰した時のことを考えて、人員補充はしないとみんなで話し合って決めたらしい。回復魔法師である私のパーティー内の役割は大きく、通常は回復役が抜けたらパーティーが回らないのだけど、そこは危ない仕事はなるべく避けて貴族が移動する時の護衛をしたり、ダンジョンの中層辺りで素材集めをしたりして稼いでいるみたいだった。

それでも本来なら回復役のいないパーティーは危ないのだが、グラン王国内でレオン達のパーティーを傷つける事が出来るレベルの魔獣や悪党などはほとんどいないとは思う。それでも、もしもの為に危険なことはしていないらしい。

貴族の護衛任務は月に一度の仕事で、まとまった休みをもらう契約になっており、護衛の時期次第で帰るタイミングはなかなか調節し辛かったりするみたいだった。

レオンはレイの出産にはタイミングが合わず、立ち会えなかったけど、子供の名前は事前に決めており、男の子でも女の子でもレイにすると決めていた。

親の才能が子供に遺伝する事がよくあるので、もしかしたら凄い子供が生まれるんじゃないかと冒険者仲間からは言われていた。私もレオンもかなりの親バカになりそうだと思う。レオンも子供の為なら天竜だって倒せるんじゃないかと言っていた。レオン似なら剣士系で、私似なら魔法師系という感じに育てたいとは思うけど、何の職種になるかはある程度は親の職種が影響されるらしいが、神の采配であるので運次第になる。

そして、生まれてきた子供は父親似になり、髪色が金色をした男の子だった。父親のレオンはレア属性の雷属性で、子供も似たような色の髪だったので、きっと属性も遺伝してる筈だ。しかも、瞳が左眼は金色で右眼は黒色だった。

瞳の色が左右違う場合は魔眼使いの可能性が極めて高いと噂で聞いたことがある。

魔眼の種類にもよるけど特殊属性と一緒に生まれてくる確率はかなりレアで将来が楽しみではあるけど、ちょっと不安要素もある。魔眼使いは、魔眼の種類により短命だったりもするし、魔眼協会という謎の組織に誘拐されるという噂もあるのだ。まあ、私が近くにいる限りは誘拐なんてさせないけど、魔眼に関する情報はモロットみたいな小さな町には全くないので、早めにレオンと相談したかった。それに早くレオンも帰って来てレイを見て欲しいなと思っていた。

レオンならきっと自分に似た属性持ちで魔眼使いなら『レイを冒険者にするぞ！』って言い出しそうだった。それに魔眼使いはほとんどが特殊スキルを内包している筈だから、もし危険なスキルだったら無意識に発動すると危ないと言われている。

3歳から5歳位にかけて魔眼や属性の制御を教えておかないと周りの子供達が危ないと聞いたことがある気がした。

それにしてもレイはほとんど泣かず、話に聞いていたような子育ての苦労が全くなかった。むしろレイの視線には知性を感じる時すらある。その辺も魔眼に関係してるかもしれないと思っていた。

【レイ】

自分がクリーンの魔法を先程取得したのだが母親が部屋にいるので赤ん坊のふりをしているが、早く魔法を試したいという気持ちが高まり、ずっとウズウズしていた。おっ、やっと母親が部屋から出て行ってくれたな。

さっきもそうだけど、母親はたまに自分の魔眼をじ～っと見つめたりする時がある。もしかしたら魔眼には見た目で分かる特徴でもあるのだろうか？

もしくは鑑定したりすると見た目に変化が起きたりしているのかもしれないな。

例えば、目の色が変わるとか、瞳に魔法陣が浮かび上がってくるとか……。

いや、瞳に魔法陣は恥ずかしいな。まあ、それは今考えても仕方ないから良いとして、早速覚えたばかりのクリーンを試したいと思う。今まで魔法の使い方が分からなかったが、クリーンのスキルを取得した事により、クリーンの使い方が頭の中にマニュアルみたいな感じで流れて来ていた。先程からクリーンの魔法を発動手前までを繰り返して魔法について分かった事があった。

魔法の使い方は……。

まず、使いたい魔法のイメージを固めて、魔力を固定する。

そして、発動したい魔法の対象を指定する。もう既にクリーンの魔法は取得してるので、ざっくりしたイメージでもクリーンは発動するみたいだ。ここで思ったのが、覚えていない魔法でも、イメージで魔力さえ固定する事が出来れば、新しい魔法が使えるんじゃないだろうか？

どういう法則でスキルを取得するかは謎だけど、試してみる価値はありそうなのでクリーンが成功したら試していこう。もし自由に魔法を作れるなら、ラノベ等に出ていた、いろいろな試したい魔法が沢山あるのだ。もし、自由に魔法を取得する事が出来るのなら楽しみだな。

体内にある魔力を魔力操作で手のひら等に、固定した魔力を集めていき、一気にイメージによって固定した魔力を放出する。ここでどの位の魔力操作が出来るかで、魔法の仕上がりが変わってくると思われる。こうやって魔法の仕組みを考えると、この世界での魔力操作というスキルの重要度が非常に高いのが凄くよく分かる。威力調節なんかもこの魔力操作の段階で決まるのかもしれない。

それにしても初めての魔法だから失敗したくないなと思う……。

自分のメンタルはそこまで強くないから、念の為に少しだけ多めの魔力を込めてみようと思い、前世でもなかなかやらない位に意識を集中していた。

……。

未だに赤ん坊だからなのか、精神が安定してないのか分からないが、魔力を魔力操作によって集中して集めていくのだが、これがとても難しい。魔力操作の為に、日々の訓練に瞑想でも入れてみるかな？　と本気で考えていた。

そこから魔力操作により魔力を手のひらに集める作業を何回か失敗していたが、やっとクリーンの魔法に必要だと思われる魔力が溜まってきた。

集まった！

「あう！」（クリーン！）

手のひらに集まった魔力がフワッと消える感覚と共に、自分の身体がピカッと輝いた。

「あぅ！　あう!?」（うぉ！　まぶしいっ!?）

予想外の光量にビックリしたあと、皮膚の表面がもぞもぞする感じになった。これは母親が使用してくれていた感覚と同じだから、魔法は成功したようだ！

遂に前世で夢にまで見た魔法を使うことが出来たのだっ!!

幼児で魔法が使えるとか、もしかしたら記憶にはないが、女神様から転生者特典みたいなものを貰っており、一般人より凄い才能があるのかもしれない。乳児期じゃなければ小躍りしそうな嬉しさだった。

そしてクリーンの魔法が発動したけど、手のひらに集めていた魔力は全部は使わずに少し残っており、しばらくしたら霧散したような感じで消えていった。

手のひらに集めた魔力は全て使い切る気持ちでクリーンの魔法を使ったのだけど、多少は魔力が残ったのを考えると、もしかしたらクリーンの魔法は消費する魔力はゲームみたいに固定なのかもしれない。

それからは何度も飽きるまでクリーンの魔法を使い、楽しんだ。

夢にまで見た魔法は、たとえしょぼいクリーンだとしても何回使用しても楽しかった。そして何回クリーンの魔法を使っても魔力が切れたり、枯渇している感じにはならなかった。クリーンは魔力消費が少ないのか分からないけど、魔法を使用した瞬間だけ体内から魔力が消える感じはあるが、呼吸とともにすぐ元に戻っている感じがしていた。この世界の魔法は無限に撃てるということなのだろうか？

もしそうなら空中から魔法爆撃みたいな事を疲れるまでやれば無敵な気がする。いや、

相手も同じ条件なら無敵にはならないか……。

こういう分からない事が多いから、早く誰かに魔法の基礎を学びたいなとは思う。

さて、次は未取得の魔法でもイメージさえ出来ていれば使えるかを試してみよう。最初はどんな魔法で試すのが良いか考えたが、本来なら自分の属性である雷属性で試したい。しかし、放電に失敗して部屋が燃えたり、感電死でもしたら嫌なので、無難な風属性を試したいと思った。

クリーンが何属性なのかは分からないが、雷属性ではないことは分かったので、ステータスに表示されている自分の属性は得意属性なだけであり、他の属性も使えるのではないかと考えていた。

さて、初級の風属性と言えばそよ風を起こす事かなと考え、空気を動かしてそよ風程度を起こすようなイメージを固めて魔力を手のひらに込めてみる。

……。

魔力はしっかりと手のひらに集まってはいるが……反応がない。失敗の原因はそよ風のイメージ不足なのかな？

そもそものイメージの仕方が間違っているのか？

そよ風を科学的に説明しろといわれても、専門外なので、室内で風を起こす方法なんか知らないしな……。

風を起こすイメージと言えば羽根の回る扇風機位かな。それからは、いろいろな風に関するイメージを試してみたが、どれも反応が無かった。そもそも属性があるということはファンタジー要素で魔法現象が起きるのだろうか？

正解への道が分からない迷宮を進んでいるみたいだ……。

試行錯誤しながら数時間が経過したが、失敗続きだった。

今日の練習が出来る時間は終わり、収穫はクリーンが成功したことだろう。

やはり異世界転生だとしても慢心せず、頑張ったほうが良いかもしれない。なんでも思い通りに行くと思ったら大間違いだな。仮に才能が有っても、天狗になって魔眼だけの人とかになるのは嫌だしな……。

だけど諦めるのはまだ早いので、今後も引き続きこの練習をしようと思う。

クリーンの魔法を取得してから数日後……。

現在考えられる魔力消費方法は、クリーンをひたすら連続で使用するしかないので、クリーンを繰り返す作業をずっとしていた。今では手のひらに魔力を集めるのもだいぶ慣れ

てきており、連続して使用する事が出来る様になっていた。

そして、クリーンを連続して使用する事が出来る様になった事で、初めて魔力が足りなくなり、魔法が発動しなくなった。

しかし、クリーンが発動しなくなったのも、たったの数分だけで、魔力が自然と補充されたのか、すぐにクリーンが使える様になっていた。これにより分かったことは魔力が枯渇しても、ラノベ等でよくある気絶状態にはならず、ただ魔法が発動しないだけらしい。しかも、魔力の回復スピードがかなり速いのかもしれない。クリーンの魔法が単純に燃費が良いだけかもしれないが……。

これなら安心して魔法の練習が続けられる。もしかしたら、そよ風を起こすのは魔力が足りないだけかもしれない。そう考えると自分の魔力量はかなり少ないのかな？

自分は生まれたばかりだから基準がわからないな。今後は魔力操作、新魔法の練習、魔力消費、鑑定を繰り返そうと思う。一気にやることが増えたな。言葉に関しては、母親にアウ～、アウ～と話しかけては返事を聞いているが何を言っているのかが、未だによく分からなかった。ステータス画面や鑑定等の文字は何故か日本語だったりするし。勝手に知っている言語に変換されてるのかな？

どうせなら異世界言語とかのスキルが最初から欲しかった。

それから数日後……

毎日の日課である魔力操作をこなしていたら、部屋に知らない男性が母親と共に入ってくるなり、何かを叫びながら抱きついてきた。

「○△×○×○▲！」

自分に抱きついてきた金髪の爽やかな男性は、かなりのイケメンだったのだが、男性に抱きつかれるのは本能的に嫌だった。

嫌がるアピールで、全力で両腕の力を使い離れようとするが、所詮は赤ん坊の力なんて無いに等しいのか、ビクともしなかった。イケメンは爆死してしまえば良いのにと少しだけ思ったが、このイケメン男性は母親と一緒に部屋に来た事など、状況整理をすると自分の父親である可能性が非常に高かった。

そして何故か、このイケメン男性は金色のカッコイイ竜の鱗（？）を着ており、表面の肌触りは悪くなかったが単純に硬くてちょっと痛かった。赤ん坊に抱きつくとき位は鎧を脱いで欲しいものである。

自分はイケメン男性への抵抗として、鎧が硬くて痛いよアピールを母親にしてみたら、イケメン男性は母親に頭を叩かれていた。というか、このイケメン男性は母親との距離感

から父親だと確信した。イケメン男性の身長は母親より頭1つ分高く、鍛えられた細マッチョなのが羨ましい。爽やかイケメンなのに何故か凄く強そうに感じた。

未だに自分の容姿は分からないが、両親共にもの凄く美形なので、将来的に自分もイケメンになれる可能性があるかもしれない。イケメンになれたのなら、それだけでも転生の価値があったなと思った。

それにしても父親は何の仕事をしているのだろうと気になった。見た感じでは鎧を着ていて前衛職だけど、騎士っぽくは無いから傭兵だろうか？

金色の鎧を着た騎士や警備兵がいたら成金っぽくて嫌だしな。まあ、金色の傭兵も微妙か……。

というか何故、金色の鎧なのだろうか？

父親の鎧をこっそり鑑定してみたら、雷天竜の鱗鎧という名前が出てきた。この世界に魔法があったのもビックリしたが、竜がいることにも驚きを隠せなかった。雷天竜がどんな強さかは分からないけど、雑魚では無いのは分かる。もしかしたら父親は結構凄い人だったりするのだろうか？

しかし、父親は自分にべったりでかなりの親バカな感じだった。最初は嫌だったのだが、ちょっとイケメンにベタベタされるのは奇妙な感覚で嫌いでは無くなっていた。

……初めての子供だと親は大体こんなものなのかな？

父親との対面から2日が経過したのだが、この2日間はじわじわと不満が溜まって来ていた……。

その理由は、ずっと近くに父親がいたせいで、魔法の練習が全く出来なかったからだ。この寝室以外に何部屋あるのかは分からないが、父親はほとんどの時間を寝室で過ごし、自分の事をニコニコしながらずっと見ていた。

しかし、父親は2日間位の滞在をしたら、名残惜しそうにしながら家から出て行った。

別れの日にはイケメンにそんな顔をされたら、自分の方も惚れてしまいそうだよと思ってしまった。

そして、自分はやっと父親から解放され魔法の練習を再開するのだった。

自分はクリーンを覚えてから、毎日の自己課題として魔力操作や鑑定、新魔法の練習など、毎日楽しみながらやり続けて、およそ半年位の月日が経過していた。

何故、半年位かって言うと、自分の生活している部屋には、日数の分かる様なカレンダーが無いので、何度夜が明けたかって原始的な数え方で途中まで数えたけど、今ではあまり自信がない。そもそもが、この世界での時間や日数の考え方が分からなかった。ステータス画面の項目に年齢というのがあるから、年単位の考え方はあると思うけど、ずっと同じ部屋にしかいない上に情報が足りない生活は不安になり、不便だなと思い始めていた。

確か前世の記憶だと、赤ん坊はあと半年位すれば動けるんだったかな？

赤ん坊の成長具合なんて曖昧にしか覚えてないから分からないことだらけだなと思う。

クリーン以降の新魔法は未だに取得する事は出来ていないが、何となくだが頑張れば出来そうなのと頑張っても無理そうなやつ、全く不明と分かる様になっていた。頑張っても無理そうな魔法は自分の属性である雷属性以外のものである。もしかしたらという事もあるから、定期的にはチャレンジしているが可能性は低い気がする。だからと言って赤ん坊の状態で雷属性の魔法を試す気にはならないので、雷属性が使えるかは不明である。あと、頑張れば使えそうな魔法は、クリーンみたいに属性が謎なタイプである。

これに関してはよく分からないが、実践したら取得出来そうという謎の確信があった。

ちなみに今、一番欲しい謎属性魔法は殺虫である。

この世界に四季みたいなのがあるかは分からないが、定期的に虫が飛んでいるので、そいつ等を撃退出来る魔法が欲しかった。まあ、たぶんではあるが考えている虫のみを倒す殺虫魔法を使えば取得を出来ると思うが、身動きの出来ない状況で殺虫するような魔法を

散布したくなかった。下手したら自分も死んでしまうかもしれない。
一応は成長して動けるようになったら殺虫魔法を試してみよう。

初めて父親と会った日から半年の間に5回だけ帰って来たことから、父親は月1ペースの帰宅なのかもしれない。なんか前世の同僚にいた単身赴任してるお父さんみたいな感じだった。

後は二重生活とかだと、お金が心配になるな……。

寝室を見る限りは質素で、お金があるようには見えない。いや、服装だけは夫婦揃って高そうなのを着ているから、貧乏ではなくただ質素なだけなのか？

しかし、夫婦仲は良さそうだから、単純に父親の勤務地が遠いかブラック会社勤めとかのどちらかだろうと予想している。これで父親が母親に虐げられていたら、自分は可哀想になり涙が出てるかもしれない。

自分の成長に関しては首がすわり、寝返りが出来る様になったので少しは自由度が上がってきたが、まだ活動範囲がベッドの中だけであった。

前世の記憶を持ちながら転生したから、意識がはっきりしてる分このベッドのみの生活は辛い。ある意味、拘束プレイか罰ゲームみたいな感じだ。ラノベによくある異世界転生

ものの多くは何故か3歳から始まる意味が今ではよく分かる……。

乳歯も生えてきたから、そろそろ離乳食がいけると思うけど、この世界に離乳食があるのだろうか？　いい加減、ずっとミルクだけでは飽きてきたのだ……。

「あ～うあ、うわ！」（ジャンクフードが食べたい！）

まだこの世界の料理を見た事が無いから分からないけど、部屋の造りを見た感じでは文明度は低そうな気がする。将来、スキルによるチート無双は微妙に出来なそうな気配がするので、料理革命や建築や土木などの建設系で活躍することも考えた方が良いかもしれない……。

しかし、料理改革するなら貴族の息子とかが良かったな。まぁ、社交性が皆無だから普通が一番だけどね。

あと魔力操作に関しては、ずっと続けていたらボックスってスキルを取得していた。このボックスというスキルの使用用途が不明だけど、魔眼の方の眼で見た時だけ、魔力が箱形に固定されてるのが確認出来たが、普通の方の眼で見ると、何も見えなかった。透明度の高い箱を作るスキル……必要性がよく分からない。このボックスは大きさや重さも、込める魔力量次第で自由に変えることが出来た。たぶん魔力を単純に固めたり圧縮しているだけなのだろう。

それにしても魔法名がクリーンやボックスって、ネーミングセンスが安易過ぎるのだが、誰が考えたのだろうか。もしかして神様が適当に考えたとか？

しかし、このボックスは魔眼のある自分には見えるから何かと便利そうではあるけど、魔力が見えない普通の人には使い道の無いスキルかもしれない。と言うか、見えない人はどうやって形を認識するのか不明だった。

自分はデザインの仕事もしていたから、想像力は他の人よりはある方だとは思うけど、最初から見えない物の形を、フワッとした感じで想像は出来ても、正確な形を認識するのは至難の業な気がする。

それから、鑑定に関しては、使い続けた事により項目が1つ増えて、対象の状態が分かるようになった。状態は、人ならば良好とか寝不足など体調とかが分かり、木とかならば劣化具合が分かって思ったより便利だった。多分、食材なら鮮度とかが分かるのではないかと思う。衛生管理がずさんな世界ならば、それだけでも商売で食べて行けそうだった。

鑑定項目の増え方がステータス画面に表示されていた順なので、最終的には鑑定も自分のステータス画面位までの項目は調べられる気がしてきた。この鑑定スキルの使い道は人物よりも物に対しての方が有効だと思う。それは、物に使っても名前、年数、状態、説明が表示されるからだ。目利きが出来るのはとても便利だと思う。

あと、お腹とか壊したくないから食事前は必ず鑑定していた。

乳歯が生えてから少し経ち、遂にミルク卒業になった。

そして離乳食？が出てきたけど、それはよく煮込んで柔らかいけど大きめの野菜がタップリ入ったスープだった。ペースト状の食事は介護食みたいで嫌だったから良かったけど、もう少し野菜を刻んで欲しかった。野菜の大きさが大人が食べるひと口サイズだったのだ。転生して死因がのどを詰まらせるとか嫌すぎるので是非もう少し小さくして欲しい。あと、乳歯は生えていても、ほとんど噛めない気がする。

見た感じ野菜は前世に有りそうな種類で、将来的には料理するのが楽しみになったのは良かったが、その野菜タップリのスープを食べさせては貰ったけど、美味しくなかった。塩の味しかしないスープと言えばよいのか、幼児の味覚は大人より敏感だから普通の塩の量でもしょっぱかった。それに出汁が取れてなくて旨味も出てないから、本当にただの塩が入った野菜スープだった。

自分は前世で塩ラーメンがとても好きで、自宅でこだわりのラーメンを作っていた位なので、塩味だけの場合は美味しくするのは難しいのは分かるけど、この野菜スープは酷かった。味の要望を出したくても言葉が話せないので我慢して食べたけど、まさか塩がある

だけ幸せって事はないよね？

そんな世界では生きていく自信が無い。

それにしても塩分とりすぎは大丈夫だろうか、幼児期の塩分とりすぎは味覚バカになるからな、注意しないといけないはずだ。しょっぱいアピールでもしてみるか……。

あまり美味しくない離乳食を食べ始めてから3ヶ月位が経ったと思う。多分、転生してから9ヶ月目位ではないかと予想していた。

そして、遂に壁に掴まりながらも、自分の足で立ち上がる事に成功した。まだ数秒しか立っていられないけど、すぐに歩けるようになるだろう。

立ち上がれるようになり、今では活動範囲がベッドから寝室内に広がっていた。しかし、未だに寝室から出ていない。今までの様に、ベッドの中だけの生活よりはすごい解放感だけど、次は外の世界がとても気になっており、空がとても見たかった。

この部屋に窓はあるけど、曇りガラス（？）みたいな感じで、微かな光は入るけど外の景色はよく見えない窓だった。

透明なガラスを作る技術が無いのかな？

もしかしたら技術があったとしても、値段が高いのかもしれない。手の届く高さではな

いから触れないけど、とても材質が気になる。材質を触ったりするのが好きなんだよな。

前世ではある種の変態かつ天才？とか言われていた。

赤ん坊だから握力は無いが、手を握る事が出来る様になり、魔力操作も指先まで魔力をまんべんなく送る事が出来る様になったら、ボールという新たなスキルを取得していた。

これもボックスと同様に魔眼でしか見えないスキルで、ボックスを丸くしただけのスキルだった。

未だに使い方は分からないが、撃ち出したりするスキルなのかもしれない。

この寝室には本が一冊も無くて、ベビーベッド、布団と洋服棚位のシンプルな感じになっている。あとは、父親が買ってきてくれた、積み木位だろうか。

最近は新しい事には挑戦せず、コツコツと魔力操作などの能力向上に努めている。

どうしてかというと、最近になって両親の会話が一部だけ理解出来るようになってきており、それによると3歳位から両親が魔法を教えてくれるような事を話していたからである。

両親の話を正しく理解出来ているならば、雷属性が使えて、魔眼がある自分はかなりのレアらしく、成長を期待されてる代わりに間違った使い方をすると周りが危ないらしい。

それを聞いて事故などが怖くなったので、あと2年位は基礎だけを鍛えて、両親が魔法を

教えてくれるのを待つことにしたのだ。

両親は元々同じパーティーの冒険者をしていたらしく、母親が妊娠をきっかけにパーティーを抜けて、父親はパーティーを継続しているみたいだった。特定の依頼者がいるのか仕事としては同じ事を繰り返してるらしい。

あとファンタジーの定番である冒険者や魔獣もいるらしい。

しかも、竜とか魔王とかみたいなのがいる世界みたいだし、異世界ファンタジー感が凄いけど、かなり危ない世界みたいだ。

食事は相変わらず細かく刻んだ野菜スープで、たまに肉の味がした。

しかし獣臭くて最初は吐きそうになったけど元日本人としては一度口に入れたらマズくても食べろと言われていたから我慢して完食している。野生の獣を狩ってるのだろうか？

前世で食べた鹿肉のジビエ料理よりも獣感がすごい。放牧された美味しい豚肉が食いたいなと思い始めていた。

早く美味しいものを食べたいところである。言葉は理解出来るようになってきているけど、まだ喋れないので話せるようになったら母親に料理の基本をさり気なく教えようと考えている。

目指せ、食卓改善！

第2章　試行錯誤

自分はこの世界に転生してから、やっと2年が経過して2歳になっていた。
自分の周りでもいろいろ変化があったが、自分の中での一番に変化したのは、会話が出来るようになった事である。まだ舌の動きがぎこちない関係なのか、完全に思い通りには話せないけど、そこは成長すれば大丈夫だろうから、これからかなと思う。
前世では英語すらあまり覚えられなかったから、不安ではあったけど、ある程度形にはなったから一安心である。
「おかぁさん、おはよ〜」
「レイ、おはよう」
未だに父親は外で働き、母親との二人暮らしであった。2歳に成長して外には出られたけど、まだ庭までしか許されていないから、毎日やることが同じになってくるので、かなり飽きてきた。
「あさごはんまでそとにいく〜」
「分かったわ、気をつけてね」

うちの家は思ったよりも広くて、平屋建ての4LDKで庭もかなり広い。もっとラノベに出てくるファンタジー版の中世ヨーロッパみたいなイメージかと思えば、お風呂があったり、水道もトイレもある。家電製品の代わりに魔道具というものが一般家庭にも普及しているみたいだ。それでも魔道具は維持コストがかかるみたいだから、導入を最低限にしている家庭も多いみたいだ。
今、自分は体力作りの為に庭で走ったりして遊んでいる。2歳だから体力はもちろん無いのは仕方ないとは思うけど、自分には同い年の幼なじみがふたりいるのだが、そのふたりに比べるとスタミナが全く足りない気がしていた。
ステータス画面にある成長スピードの影響が強いと思われるが、成長スピードが遅いなら人一倍頑張るしかないと考えていた。前世でも運動神経は無かったから、今度はハイスペックな身体能力を手に入れたかった。
朝は庭で軽く疲れてくる感じになるまで、走ったりして遊んでから、家の中に戻る。そろそろ朝ご飯が出来てるかな。
「ただぃま〜」
「おかえりなさい。丁度ご飯が出来たわよ」
当然だけど、未だにご飯作りには介入が出来てない。

母親が作るご飯は未だに美味しくないから手伝いたいけど、2歳児にはどう考えても無理だった。何度か母親が料理してるところを後ろから見たけど、調味料が足りないと言うより母親が料理を作るのが苦手な印象を受ける。

キッチンにはほこりをかぶった調味料が大量にあったり、包丁の使い方が危なかったりと、もしかしたら結婚するまで料理自体をした事がないのかもしれない。そして、毎日似たような塩味の野菜スープを食べていく。塩分に関しては話せるようになってから、しょっぱいアピールするとすぐに減らしてくれた。

だからと言って野菜スープが旨くなったわけではないけど……。

野菜スープの朝ご飯を食べたら、また外で運動をする。

手先がまだ上手く動かせないから、小さいうちは砂遊びしたり、地面に絵を描いたりして、手先を鍛える遊びをしていた。前世では、インテリアデザインをしていた時もあり背景画を描くのは得意だった。パソコンが普及してからは手書きで建物の透視図（立体的に描く技法）を描く人が減っていたけど、自分は手描きが好きだった。多種多様な構造物の図面を見ては脳内で立体図を想像する。住宅などは外観を見ただけで間取りが大体分かった。そんなこともあり、自分が勝手にテーマや敷地条件を決めて、地面に設計した図面を描いたり、外観図を描いたり、庭から見える風景を描いたりと2歳児は絶対にしないひと

り遊びをしていた。

お昼を食べてからはお昼寝タイム。

……と思わせて、ベッドの中で魔力操作の練習をしていた。魔力量を増やす方法に、実は裏技的なものはなく、自然にあふれている魔素というエネルギーを動物などの生き物が取り込む事で体内で魔力になり、その肉を食べることで人間は魔力量が上がるというのが一般的な解釈らしい。肉が生臭くてあまり食べたくないと母親に話したらそんな難しいことを言われて、最後には肉を食べると強くて元気になるから食べなさいと強制的に食べさせられたものだ。今では食べる頻度が1週間に1回程度なので我慢して食べている。

あと魔力の上昇率は個人差があり、同じ肉を食べ続けても差は出たりするし、住んでいる地域によっても魔力量は変わるとかなんとか。そういえばこの世界の時間や曜日の考え方は地球とほぼ一緒みたいだった。

1日24時間　　1ヶ月30日　　1年360日

あまりに同じ過ぎるので自分以外の転生者が過去にいたんじゃないかと考えている。自分としては時間などが一緒だと非常に分かりやすくて助かるけどね。

あと魔法に関しては、いろいろと試す事でいくつかの魔法を取得していた。

魔力操作関係で覚えたのは……。
クリーン……身体の皮膚より外側の汚れと認識したものだけを落とす。イメージと技術で汚れの落ち具合が変わる。
ボックス……魔素を四角い形に固める。中をくりぬいたりイメージ次第で応用が可能。
ボール……魔素を丸い形に固める。属性を付与する事で応用可能。
シールド……魔素を板状に固める。属性を付与する事で応用可能。
ハンド……魔素を触手状にして手のように操る。属性を付与する事で応用可能。
ストレージ……次元収納。許容量は魔力操作次第。内部時間は止まる。
この6種類を取得していた。
これらは取得はしたけど全然思い通りにならず、ほとんど使えないと言っても良い状況だった。やはり魔法や魔力操作などのスキルに詳しい人からコツを聞きたいと、最近思うようになっていた。
あと、殺虫魔法は未だに取得出来ていなかった。イメージ的には使用すれば取得出来そうだったのに不思議である。自分が覚えた魔法が一般的にどこまで凄いのか分からないので人にも聞けていないでいた。
2歳児が魔力操作などを必要とする魔法を使う時点で、異常なのは間違いないとは思う。

いらないトラブルは起こしたくはなかった。他人に聞いていないのに何で魔法の効果が分かるかというと、自分のステータス画面に表示されたものは鑑定を使用する事が出来たから詳細も少しなら分かったのである。
しかし固有スキルであるジョブホッパーと鑑定の魔眼に関しては鑑定を使用する事が出来なかった。もしかしたら熟練度的な何かが足りてないのかもしれない。
魔力操作と魔眼、鑑定を練習すると最近は疲れて眠くなるので、そのまま本当にお昼寝タイムに入り、起きたら晩ご飯食べてまた寝るという流れになっていた。
ちなみに魔法を発動した時に光るのはクリーンの使用時だけで、発生する光を抑える方法は分からなかった。

【レオン】
俺はグラン王国を拠点にする冒険者をしていた。
嫁のソフィアや仲間達と共に冒険パーティーを組んでいたが、初めての子供が生まれることでソフィアがパーティーから抜けて育児に専念する事になった。
本当は親子3人で一緒に暮らす方が良いけど、活動拠点にしている冒険者の街・スカウ

トフォードでは俺達のパーティーは有名になり過ぎて、俺達にしかこなせない仕事依頼が多く、子育てには向いていないと話で決まった。

仲間達にその事を相談したらモロットに良い物件を紹介してくれて、ソフィアには移り住んで貰うことにした。もう少し近い方が良かったが安全面ではあの町以上に優れているところを俺は知らないから仕方ないと諦めている。

何故小さい町であるモロットが安全かと言うと、あの町には以前、依頼でお世話になっていたハンターのエリーさん、鍛冶師のガインがいるからである。ふたりとも同世代の中で超有名人で、エリーさんに森の中で襲われたら勝てる者はグラン王国にはいないと言われる位だ。いや、王国内に限らず勝てる者は世界的に少ないかもしれない。

エリーさんの固有スキルである忍術は、万能という言葉がぴったりな位に凄いスキルで、属性の制限を越えた多種多様なスキルを使うことが出来るみたいだ。俺も多種多様なスキルを欲しかったなと思う。

ガインさんは元々ドワーフの王国であるバロン王国の騎士団長をしており、封印の剣王と呼ばれる伝説的な剣士だ。剣に分類される武器なら自由自在に操り、生成出来るという神がかったスキルも取得しているらしい。

今ではグラン王国とバロン王国の両方から依頼のある職人で、ガインさんの武具を装備

した騎士団は一時期、異様な殲滅速度で魔獣を狩っていた。

そんなふたりにもソフィアの事をお願いしたら、ふたりにも子供ができたばかりだったらしく、間もなく生まれる俺の子供にも良い仲間が出来そうだと思った。あのふたりの子供だと、凄い才能のある子供が生まれそうだなと思った。まあ、俺の息子が一番凄いだろうとは思っているけどな……。

仕事も昔ほど危なくないものに変更しても、護衛主の優しさで収入も割と良くしてもらっている。唯一の不満はスカウトフォードとモロットの距離が遠くて、仕事の関係で月に1度しか帰れない事だった。

次にソフィアの元に帰るときは子供が生まれるだろう。

1ヶ月後……俺は出来る限り早くソフィアの元に帰った。

「ソフィア！　やっと帰ってきたぞ！」

「お帰りなさい。レオン」

俺の帰りを出迎えてくれたソフィアのお腹はスリムになっており、子供が生まれているだろう事が分かる。

「やはり子供はもう生まれちゃった？」

「ええ、レオンがいなかったのは残念だったけど、無事に息子が生まれたわ」
出産に立ち会えなかったショックと息子が生まれた嬉しさで涙が出てしまった……。
「ソフィア、ありがとう」
「早速、私達の息子であるレイに会ってあげてね」
「ああ、そうしよう！」
息子のレイは可愛く大人しい感じでずっと見ていても飽きることは永遠に無いんじゃないかと思える位だった。
それと同時にレイの容姿を見ていろいろな理由でびっくりしていた。

その日の夜、俺はソフィアとレイについて話し合うことにした。
「レイは魔眼持ちなんだな。流石にまだどんなタイプの魔眼かは分からないよな？」
「そうなのよね。定期的に眼を確認しているけど、私にはどんな効果の魔眼かは分からないわ。危険な魔眼じゃなければ良いけど」
「うーん、俺も魔眼持ちはほとんど会ったこと無いから詳しく分からないな……これはしっかりと調べないとな」
「そう言えば、アリアちゃんとミリアちゃんが魔眼持ちだったわよね？」

「アリアちゃんとミリアちゃん？」
そんな魔眼を持った人に会ったことあったかな？
「ああ、あの時はレオンがいなかった時かしら？　あっ、違うわね」
「なんかの依頼の時か？」
「昔に謎の組織からふたりの少女を離脱させて欲しいって依頼があったじゃない」
「ああ、思い出した。俺が組織の追っ手の足止めをしていたやつだな。あの依頼はきつかったな……」
謎の組織からの追っ手がやたらと強かったんだよな……。
「ええ、その少女がアリアちゃんとミリアちゃんなんだけど、ふたりとも両眼を隠していたから魔眼持ちっぽかったわ」
「なるほどな。でも数年前の少女ふたりの居場所なんて分かるのか？」
あの依頼は秘匿性が高く、保護対象が少女ふたりだったから、少女の詳細はソフィアともうひとりの女性メンバーに任せて聞かなかったんだよな。
「足の付かない家を確保していたから、多分まだいるわよ。住所を教えるから訪ねてみて」
「ああ、分かった」

俺も数人は魔眼持ちに会ったことはあるが、ほとんどが敵対していたから、ソフィアの言う魔眼の少女ふたりの件はありがたいと思った。

「しかし、レイの魔眼は今まで敵対していたヤツらとは雰囲気は違っていた。しかも生まれつき魔眼を発現しているタイプは初めて見たな」

「私もよ。レイの瞳には力強さと理性を感じるわ」

「スカウトフォードに戻る前に、少女ふたりがいる町に寄るよ」

「ええ、お願いね」

俺は魔眼持ちの少女ふたりが住んでいるであろう町クラウシスに来ていた。この町は魔獣か何かに襲撃されたみたいに崩壊していた。

しかし、町が襲撃されれば冒険者である俺にも何かしらの情報が入る筈なのだが、クラウシスが襲撃されたとは聞いたことがない。

「まずは生存者がいるかを調べないとな……」

町内を探索し始めてから、すぐにこの襲撃の異様さに気が付いた。

町には戦った跡はあるのだが、魔獣の死骸や人の死体が1つもないのだ。俺は戦うのは

得意だけど、こういう人探しや探索になるとかなり苦手だったりする。ほとんど戦闘以外の仕事は他のパーティーメンバーに任せているからな。

しばらく探索したが町の人は一切見つからなかった。

そこでどうしようか迷っていたら、町から少し離れた場所にも一軒の小屋があることに気が付いた。

小屋は町内の家とは違い、争った形跡もなく綺麗なままだったが誰もいなかった。

「どうなっているんだ……早急にスカウトフォード……いや、グラン王国の王都へ行った方が良いか。ん？」

微かだが、人の気配がする……。

隠れている感じではないが、何処にいるか分からないな。俺は小屋の中をくまなく探してみたら地下室への隠し扉を発見した。

「こんなところに隠し扉は怪しいな……」

俺は警戒をしながら地下へ降りていくと、ひとりの倒れている女性を見つける事が出来た。その発見した女性は、魔法使い風の服装をしていたが、至る所に傷がありボロボロの状態で倒れていた。

「おい、大丈夫かっ!?」

「……な、なんとか」
「すぐに回復ポーションを使ってやるからな！」
俺はボロボロの女性にすぐさま回復ポーションを飲ませてあげると効果が出てきて、荒い呼吸が穏やかになった。
「あ、ありがとう……町の人達は……？」
「いや、俺が町に来たときには誰もいなかったぞ。この町に何が起きたんだ？」
「……ごめんなさい。うっ、うっ……」
唯一の生存者は突然泣き出した為に、すぐに会話が出来る状態ではなかった。

【レイ】
自分が転生してから約2年が経過していた……。
今日は久しぶりにお父さんが帰ってくる日だったので、自分とお母さんはお父さんが帰ってくるのを町の入口で待っていた。
「レイ、きっとあの馬車にお父さんが乗っているわよ」
「あぃ～！」

本当はもっと普通に話せる様になっていたのだが、周りの子供の会話レベルに合わせているのだ。うっかりまともに話さないようにするのは結構なストレスではあったが、円滑にこの世界に生きるための処世術だと割り切って、子供を演じきっていた。
「レイ！　お父さんが帰ったぞ！」
「おとぅ～。おかうり～」
「レイはもうこんなに話せるなんて流石だな！」
「お帰りなさい、レオン」
「ああ、ただいま。レイは相変わらず賢そうだな……俺達の息子は天才かもしれないな」
「確かに、レイより少し前に生まれたブラットくんやエレナちゃんより賢いかもね。ただ、体力的にはふたりに負けてるかもしれないわね」
「やっぱりふたりより賢いか！　体力的な事は種族特性が違うし、仕方ないだろう。それにガインさんやエリーさんの子供達だから才能の面では勝つのは普通に難しいかもしれないな」
「……それもそうね。あのふたりの子供ってだけで将来が凄そうよね。それに、レイは魔法師系だと思うから体力的に負けているのは仕方ないわね」
「俺的には雷属性を引き継いでいるから前衛職になってもらいたいが、雰囲気的にはソ

フィアの言う通り、魔法使い系かもしれないな」
両親は自分がどこまで会話を理解しているか分かっていないけど、会話を理解出来ている自分としては期待が高すぎる気がした。というか自分はやはり魔法使い系なのか……。
何となく、2人いる幼なじみ達より身体的なスペックが違う気がしたが、仕方ない事なのかな？
そう言えば、さっきからお父さんの後ろに見たことのない女性がいるのだが、誰だろう？
まさか、いきなり修羅場とかはないだろうな？
「だれ？」
「ああ、悪かった。この人はレイのお世話をしてくれるアリアさんだよ」
アリアと紹介された女性は、魔法使いみたいなローブに仮面をつけた怪しい風貌だった。長い髪とスタイルで女性だと分かったが、子供の世話係の格好としてはアウトな気がする。
「おせわ？」
それに、自分には世話係なんていらない気がするのだけど……。
うちにはお母さんがいるし、世話係を連れてきた意味が分からない。
「そうだぞ。これからはお母さんの他にアリアさんにもレイの面倒を見てもらうことにな

ったからな」
「レイくん、初めまして。私はアリアと言います。これから少しの間よろしくね」
「あい～！」
「レイ、私はたまに冒険者として復帰しなくちゃいけない時があるかもしれないから、念のためにアリアちゃんをお手伝いとして来てもらったのよ」
「あい」
「まあ、期間は長くても1年位なんだけどな……」
なるほど……。
アリアさんが自分の面倒を見るのは既に決定しているみたいだった。アリアさんはしばらく自分の顔を不思議そうにじっと見てきたのだが、どうしたのだろうか？
「レイくんはもしかして言葉が分かるのですか？」
「あぅ……？」
あれ？　言葉を完全に理解しているのがバレた？
「いや、分かるときと分からないときの半々だな」
「そうなんですか。レイくん、ちょっだけ眼を見せてもらいますね」
そう言うとアリアさんは仮面を外して、顔を自分の顔に近付けてきたのだが、アリアさ

んの眼を見てびっくりした。
アリアさんの両瞳には不思議な魔法陣みたいなものが浮かび上がっていたのだ。もしかして、これが魔眼なのかな？
そして、すぐにアリアさんの魔力が自分に向けて放たれているのが見えた。魔眼を発動するとみんなこんな感じになるのかな？
見た目でも魔法陣が浮かび上がるし、魔力が放たれているしで、かなり魔眼を使っているとバレバレな感じだとすぐに分かった。これからは魔眼を使うとき、更に注意しよう。
「ふぅ～、レイくん、ありがとうございました」
「あぅ～？」
アリアさんは何かをやり終わったのか、仮面をつけていた。
「アリアちゃん、どうだった？」
「魔眼の種類は正確には私にも分かりませんでしたが、２歳にして魔眼を完全制御しているのが分かりました。レイくんは私やミリアみたいにはならないので安心して下さい」
さっき、顔を近付けられた時に何か調べられたのかもしれないな。
「おお、そうか。アリアさんありがとうな」
「いえ、それにしても大人ならまだしもここまで制御を出来ている子供を見るのは初めて

です……これなら」
自分達はお父さんやアリアさんと一緒に家に帰ると、お父さんはいつもの様に自分と遊ぼうとしてきた。
「レイ～。ちょっとお父さんと遊ぼう！」
「や～!!」
最初の頃はお父さんの反射神経についていけずに、あっさりと捕まっていたが、最近は自分に抱きつこうとしたら、先読みして逃げられる様になっていた。そして自分のゴール地点であるお母さんに抱きつく。
「何故だ……」
「たまにしか帰れないから仕方ないんじゃない？」
「……そうかな？　なんかたまにおっさんうざいみたいな視線をするときがある気がするんだが？」
「それこそ、気のせいよ。レイはまだ2歳なのよ？」
「確かに……。そうだよな」
お父さん、ごめんなさい。たまにうざいと思っていました……。
その後、お父さんから逃げながらお母さんやアリアさんのところへ行くことを繰り返し

ていた。
アリアさんは仮面をつけていなければ美人だし、優しいので割とすぐに馴染む事が出来た。

自分は朝ご飯を食べたあとの日課になっている、庭での体力作りや、地面に文字や絵を描いたりと手先を鍛える練習をしていたら、幼なじみである例のふたりとその母親達が遊びに来ていた。
「にゃにゃ～」
「あどにぎたぞー」
「レイちゃん、おはよう」
「レイくん、おはようにゃ～」
「こんにちは」
ここで自分の幼なじみであるふたりの紹介を軽くしておこう……。

名前・エレナ（2歳）状態・良好　属性・氷　職種・無
エレナは青白くて少し癖っ毛の髪に金色の瞳、笑顔は可愛いが普段は眠そうな眼をしている女の子だ。そして、エレナの頭には先がピンッと尖った猫耳に、おしりから生えている細長いしっぽがゆらゆらとしていた。
そうエレナは異世界ファンタジーの王道である猫の獣人族である。
初めてエレナを見た時は凄くビックリしたが、同時に歓喜したのを覚えている。エレナの母親の話ではこの世界には猫以外にも多くの種族の獣人族がいるらしい。
もしかしてペンギンの種族もいるのだろうか？
ペンギンの獣人がいても可愛さは半減しそうだな……。
そして、もうひとりの幼なじみは……。

名前・ブラット（2歳）状態・良好　属性・火　職種・無
赤髪に赤い瞳の将来は確実にワイルドなイケメンになりそうな顔をしている。結構雑な性格をしているようだが、実は優しい子供なのだ。ブラットの見た目はエレナと違い、自分みたいな人族と同じだけど、父親がドワーフ族で母親が人族のハーフらしい。異種族のハーフって有りなんだなと思った。
どうもこの世界は多くの種族がいるみたいだから、鑑定を上げて早く種族を表示させておきたいところである。

あと、ふたりの母親は、エレナの母親がエリーさん、ブラットの母親がシーラさんである。

エリーさんはエレナと似た雰囲気の猫獣人族で、自分やブラットには優しいが、エレナにはかなり厳しく、いつも山で鍛えられているらしい。その辺は種族によっても教育方針が違うのだろう。

そして、シーラさんはいつもニコニコした優しい女将さんって感じだった。シーラさんは食堂を経営しており、ブラットはいつも食堂のご飯を食べているらしくて非常にうらやましい。

「やっぱりうちの子に比べるとレイちゃんは賢いわね」

そんな感じでいつもシーラさんは自分の頭を撫でてくれる。

しかし、中身が前世と今世合わせて40歳のおじさんと2歳児を比べるのはズルをしているみたいで、とても気まずい。

「ブラットくんの身体能力はダントツだと思うから良いと思うにゃ」

「そうね。エレナちゃんは器用そうだし、この3人はバランスが良さそうね」

「そうだにゃ。ブラットくんとレイくんもエレナとは末永く仲良くしてやってにゃ」

「はい！」

「おう！」

自分としても幼なじみとは仲良くしたいところである。それにふたりは有能そうだからな……。

「それじゃあ、私達は中に入ってるわね」

「私達は家の中に行くけど、みんなはお庭で遊んでると良いにゃ～」

「「はーい」」

「はいにゃ～」

さてと、自分達は庭で遊ぶ事になったのだが、何して遊ぶかな。自分としては頭脳派なゲームを地面に描いて遊びたいところだけど、2歳児にそれは無理なので身体を動かすものしかないのだけど……。

「今日はなにしよう？」

「たまあて！」

「たまあてにゃ～」

「球当てか……」

球当てゲームは円の中でゴム球みたいな物を当てる単純な遊びで3人の中で良くやっていた。当てられて、捕れなければアウトというシンプルな遊びだ。まあ、前世のドッジボ

ールみたいなものだ。

「よし、球当てをやるか！　今日こそは勝つからね」

数分後……。

自分ひとりだけ負けたみたいな感じである。

基本的には前世の記憶がある自分の方が、子供の内は身体の使い方など分かっているから、有利な筈なのに速攻でゴム球を当てられて終わってしまう。というか、ふたりは2歳なのに身体能力が高過ぎると思う。

2歳ってブラットみたいに片手でゴム球をキャッチしたり、エレナみたいにジャンプして回避したり出来るものなのか？

というか自分だけが出来ないのかな？

「よえー」

「よわいにゃ～」

「次こそは本気を出す！」

それから自分は3人の中で一番早く負けていた……。

ブラットは2歳とは思えないパワーで豪速球（レイ視点）投げるし、エレナは球が当たったところを見たこと無い。

「……今日は終わりにしよう」

「あははは っ」

「よくあたるにゃ～」

おじさんの豆腐メンタルはペチャンコだよ。そんな感じでいつもお昼までかけっこしたり、球遊びしたりするけど体力勝負だと常にふたりには負けている。2歳の段階でこんなに体力差が出るものだろうか。異世界ではステータスがかなり影響するのかな？

それともふたりとも体力補正があるスキルを持っているのかもしれないな。そこは鑑定さんには是非頑張って欲しいところだ。

あとは自分が勝てる遊びってあるかな……。

前世で子供がやる遊び……。

「そうだ！　めんこをやろう」

「めんこってなんだ？」

「なんにゃ？」
「えっとね、板をひっくり返す遊びなんだけど……」
めんこに使える厚紙はないから木の板で代用出来るのかな？
確か、薄い木の板なら家の裏にあった気がするな。
自分は家の裏からめんこになりそうな木の板を10枚ほど持ってきて、裏表に傷を付けて簡易めんこの完成だ。
「完成だ」
「これがめんこか？」
「ただのきにゃ？」
「これは木を叩きつけて、相手の木をひっくり返せば奪える遊びだよ」
木の板を2枚並べて、試しに木がひっくり返るかやってみる。前世では子供の頃、得意だったからこれなら勝てるだろう。めんこはパワーよりも技が重要ではないかと思っている。

バシッ！

しーん……。
「むっ、ひっくり返らないか……」
ちょっと木の板が重すぎるのかな？
「レイ、どうすればかちにゃ？」
「えっと、相手の木の板がひっくり返れば勝ちかな」
「なら、おれがやるぜ」
「ふっ。僕に出来なかったからブラットには無理……」

バシッ！

ペロン
あっ、2枚もひっくり返った……。
「やった、おれのかちか？」
「う、うん。まぐれもあるからな……」
バシッ！

ペロン

「わたしもできたにゃ」

「おー、えれなもかちか？」

エレナも試しにやったら2枚ひっくり返す事に成功していた。

「まじかよ……」

その後、自分は言い出しためんこ勝負で未経験の2歳児達にボロ負けしたのだった……。

この世界では転生のアドバンテージは通用しないのか？

お昼はみんなで一緒に食べるのだけど、シーラさんはうちの母親より料理が上手で、遊びに来てくれた時のお昼ご飯は美味しくなる。母親が料理下手というわけでもないのか、エリーさんも似たレベルらしい。

「にゃ～」

エレナはよくシーラさんのご飯を食べている。

「シーラさんおいしいです！」

そして、自分も久しぶりに美味しいご飯なのでいっぱい食べる。

「たべあきたぜ……」

ブラットは毎日食べるからかあまり美味しそうに食べない。いや、好き嫌いはなさそうだから本当に飽きたのだろう。

しかし……。

「おい、ブラット！　それならたまにうちのご飯を食べてみろ！　シーラさんのご飯のありがたみが分かるぞ！」

「レイ、それはどういう意味かしら？」

あっ、ちょっと余計な発言をしてしまった。

「……いや、お母さんのゴハンオイシイヨ？」

その後、お母さんに思いっきり怒られた。

くそっ、ブラットめ！

こんなのんびりとした日常がずっと続けば良いと思っていた。

最近の自分は、魔力操作や魔力感知などを使い魔法の練習をしているが、大人には試せない疑問があった。2歳児になら大丈夫だろうという事で、今から自分はその疑問を解消する為に、幼なじみ達に試したいと思っている。

まずは魔力操作と魔眼を使い、ハンドの魔法を発動、展開してから、エレナの後ろにさり気なく回り込み、そして脇腹をくすぐる。

コチョコチョコチョ。

「にゃはははははっ」

今度はブラットの脇腹をくすぐる。

コチョコチョ。

「うははは っ！　きゅうにくすぐったい！」

「くすぐったくなったにゃ」

「おれも……」

よし、実験は成功だな。

やはり普通の人は魔眼が無いとハンドみたいな透明な魔法を見ることは出来ないんだな。

そう考えると、魔眼と透明な魔法は戦闘などがあるなら良いかもしれない。

「なんなレイがあやしいにゃ……」

「たしかに！　あやしいぞ」

考察に集中し過ぎてやり過ぎてしまったのか、ふたりに怪しまれてしまう。

「えっ……ちょ、待って」

そして、ふたりにくすぐられた。

「あはははははっ、やめてっ！」

悪いことをしたら倍返しで返ってきました。

その後も、ブラットとエレナにシールドやボールなど魔眼でしか見えない透明魔法を目の前で見せたりしたが、やはり見えないらしい。エレナは若干反応しているようだが、見えていると言うよりは気配みたいなものを感じ取っているのかもしれない。

この実験をふたりに試したのは、仮にふたりに魔法が見えたとしても、2歳児ならすぐ忘れてくれると思ったからだ。魔眼でしか見えない魔法は、見えない事が普通なのか、自分の魔眼が特別なのかは分からないけど、鍛えておいて損はないと思った。

この世界は魔獣がいるらしくて、かなり危なそうだから出来る限り、自衛のために訓練はやっておきたいと思った。いつ、魔獣に襲われるか分からないからな……。

そして、今まで魔力操作の練習や実験として魔法を試してみて分かった事がいくつかある。まず、ハンドは魔力操作次第で、触手の範囲と触手の本数、触手の力に影響する。触手の本数を増やしたら範囲が狭くなったり、力が弱くなったりするので、ハンドの魔法で使える魔力の総量があり、それをパラメーターをいじる様な感覚で魔力を分配するのではないかと推測していた。

今の操れるハンドは小石位の大きさしか持てないけど、将来的に武器や盾などを触手に持たせたら武器だけが宙に浮いているように見えて強そうだ。と言うか格好いいから是非

やりたい。

シールドの魔法は、ハンドと同じで魔力の総量を面積や強度や枚数のどれかに必要量だけ割り振り、強くしたり多くしたりといった感じになる。今はまだ全身を覆うような面積は無いし、強度も枚数も使えるレベルではないが、ハンドと共に将来性はある魔法だと思うので積極的に練習していきたい。

あとボールとボックスに関してはあまり必要性を感じなかった。ボックスは、スキル取得した当初にかなり試行錯誤しながら使い道を考えていたのだが、無理矢理に使うとしたら椅子の代わりや踏み台しか思いつかなかった。

しかし、他人に見えないボックスに乗ると、他人からは自分が宙に浮いてるように見えてしまうので人前では使えなかった。あと、ボックスの試行錯誤中にストレージというスキルも取得していた。この点に関してはボックスを使いまくって良かったなと思った。

しかし、この2つのスキルの関連性がよく分からないな……。

ボールも魔力の総量で、球の強度や大きさや届く範囲が決まるのだが、投げるにしても自力で投げるのなら、ハンドがあれば十分な気がするので必要性は無い。

ファンタジー世界の定番魔法のファイヤーボールみたいに、撃ち出すコツがあるのだろうか？

そして、これらの魔法は自分なりに実験してみた結果、1つの仮説を立てていた。
それは周辺にある魔素と体内にある魔力を混ぜて、密度を上げたあと自分の魔力で覆い、それを操る感じだから魔力量と魔力操作を上げる必要があるのではないかと考えていた。魔力量を上げるには肉を食べないといけないのが憂鬱であり、どうせ食べるなら美味しい肉が食べたい。この世界にある食材は似たような見た目と味や名前があるのが鑑定により分かっている。この事から、ほぼ間違いなく地球からの転生か転移者がいると考えていた。
知識チートをしたら転生者って事がすぐにばれそうだから、地球の知識はほどほどにしようと思う。その内、この世界の常識が書いてある様な本があれば両親に欲しいって言ってみようかな。似たものが有っても前世の常識で動いたら痛い目を見そうな気がするんだよな。

アリアさんがモロットに来てから半年位が経過していたのだが、突然旅立つ事になった。
彼女が旅立つ理由は自分には聞かされていないが、両親は最初から知っているみたいだった。アリアさんはモロットに来た時から長くても1年と言っていたから、何かの合間にモロットへ来てくれたのだろう。
「レイくん、私の事は記憶から薄れていくとは思いますが、同じ魔眼使いとしてプレゼン

トがあります」
「プレゼント？」
「はい。私がずっと身につけていた腕輪なのですが、もらってくれますか？」
「はい！」
そう言うとアリアさんは左手首につけていた腕輪を外して渡してくれた。
「この腕輪はきっとレイくんの助けになると思います。調整型の私よりも完全制御の魔眼使いであるレイくんが持っている方がミリアも喜ぶでしょう」
「ミリアさん？」
「はい。この腕輪はミリアという親友が将来の魔導王に向けて遺した形見なのです。今は理解出来ないとは思いますが、腕輪と共に魔導王を目指してくれると嬉しいです」
そう言ってアリアさんは自分にミリアさんの形見の腕輪を託して旅立って行った……。
本当はもっといろいろ聞きたい事があったのだが、2歳児がいろいろ質問したら怪しいだろうと思って頷くだけにした。というか魔導王ってなんだ？
完全制御の魔眼使いとか、ミリアさんの腕輪の件も謎だらけである。
「レイ、アリアちゃんからもらった腕輪はつけてみないの？」
「ぶかぶかじゃない？」

細身のアリアさんがつけていた腕輪なので将来的にはつけられるだろうけど、2歳の自分には明らかに大きかったので、まだつけてはいなかった。

「大丈夫よ。その腕輪は自動的にサイズ調整されるから」

「……え？」

なにそのハイテク腕輪。この世界のアクセサリーはサイズフリーなのか？

お母さんに勧められるがままに腕輪をつけてみると、本当に自分の細い腕にぴったりのサイズに変化していった。

【魔眼結晶・魔喰の装着を確認しました……】

【魔眼結晶・魔喰との同期を開始します】

「えっ？」

何かスキル取得以外で久しぶりに脳内アナウンスを聞いたのでびっくりしてしまった。

「どうしたの？」

「あ、なんでもないよ」

腕輪を見ると、いくつかの宝石みたいなのが付いているのだが、これが魔眼結晶ってやつなのだろうか？

試しに鑑定してみたが、鑑定不可と出てしまった……。

鑑定不可なんてあるのか。

こうしてアリアさんからの謎プレゼントを意味も分からずつけることにしたのだった。

幼なじみ達と子供っぽい遊びをしながらもこっそりと魔力操作、鑑定などを使い続けること1年が経過していた。

自分は3歳になったことにより、遂に今日から親公認の魔法訓練が始まる事になった。

そして、今日の魔法訓練に合わせて父親も休みを合わせてきたらしくて、自宅庭には自分と両親の3人がラフな格好で立っていた。魔法訓練だから、ちょっとは魔法使いっぽい杖などがあるんじゃないか？　と少し期待していたが、そんなものは無いらしい。

「今日は俺が魔法について教えるが、内容が難しくて分からないところもいっぱいあるだろうが、しっかり聞いているんだぞ」

「私はお腹の件もあるから見学しているわね」

「分かったよ!!」

母親は妊娠中になり、間もなく2人目の子供が生まれそうな状態らしい。そんな理由も

あり、父親が帰宅してるこのタイミングで魔法訓練になっていたのもあった。
「まずは難しい話は無しで、レイの魔眼について教えるぞ。とは言ってもレイやアリアみたいに魔眼を持っている者は極端に少ないから、詳細までは俺にも分からない。これから話す事はアリアから聞いた簡単な基礎知識だと思ってくれ」
なるほど、魔眼はそんなにレアなのか。もし魔眼が強かったら実力を隠したほうが良いかもしれないな。
「アリアさんがいれば良かったのにね」
「……ああ、そうだな。本来はアリアにも立ち会って欲しかったのだが、大切な旅に出ていくのを引き止められないから、仕方ない」
「そうだね」
何となくお父さんが一瞬だが悲しい顔をした気がしたけど、気のせいかな？
「俺も魔眼についてはレイが生まれてくるまではほとんど知らなくてな。アリアの話では2つの能力があるらしい。まず1つ目は魔眼保有者でも個人差が激しいらしいが、魔素や魔力が見える様になる人が多いらしい」
「うん？」
魔眼があるからと言って、全員が魔力などを見ることは出来ないのか。

「本人の持つ属性のみの魔力が見られるってのもあるし、アリアみたいに属性に関係なく魔素や魔力が見られる人もいるみたいだ。ハッキリとは分からないらしいが、魔眼の種類によって変わる傾向が強いと言っていた」
「そうなんだ」
なら自分の鑑定の魔眼は後者になるのかもしれない。
「普通、一部の者を除いてほとんどの人が魔素や魔力は見えない。当然、俺やソフィアも見えない」
それは良い事を聞いたな。そしたら今、自分が覚えている魔法のほとんどが普通の人には見えないことになるのだ。
「レイは右目で見ると霧の様なモヤモヤしたものが見えないか？」
「うん。見えるよ」
「それが魔素と言われているものだ。そうなるとレイは魔素や魔力が見えるタイプの魔眼みたいだな。そして魔眼のもう1つの能力に関しては他人には分からない」
「え？」
まさかの分からないのか!!
びっくりし過ぎて変な顔になっていたらしく、父親がそれを見て苦笑いする。

「まあ、調べる方法はあるから安心しろ。心の中でステータスと考えれば、目の前にステータス画面というのが出てくるからレイもやってみろ」

ああ、なるほど。魔眼のもう1つは鑑定みたいな固有の能力って意味か。ステータス画面が見えるのは一般知識なのか、鑑定の魔眼についてはとりあえず正直に言うかな。

「鑑定の魔眼ってあるよ」

「鑑定の魔眼か。鑑定は貴重ではあるが鑑定する事が出来る魔道具があるからな。名前、年齢、状態、属性が分かる。だがステータス画面にある様な職種とスキルは分からない」

なるほど、そしたら自分の魔眼はむしろ隠す必要がないのか。道具でも代用出来る魔眼だと思ってもらった方が他人も安心かもしれないな。

……ん？

自分の鑑定は職種が分かるよな？

それに成長スピードも分かるけど……。

何か普通の鑑定と自分の鑑定は性能が違う気がしてきたぞ。とりあえず余計なことは言わない方が良いから鑑定初期には名前しか分からなかったからそう伝えるか。

「名前しか分からないよ？」

「ふむ……。最初だから名前しか分からないのかな。ステータス画面では表示されないが、

スキルには練度というものがあってスキルは使い続けると上達する。今のレイにはまだ難しい話かもしれないな。とりあえず、レイの魔眼は危ないものではなくて安心したぞ」

「……危ないのもあるの？」

「風を操ったり、未来や過去が見えたり、魔素を吸収、見たものを石にしたり、麻痺、魅了など過去の歴史でたくさんあったらしい。でも子供の内はほとんど効果が出ないから小さい内から訓練すれば大抵は制御出来るらしいが、能力次第では制御不能になる場合もあるらしい」

石化とか魅了はやばいな……。

「そうなんだ」

「あとは歴史的に問題になったのが、制御不能になり暴発した事により大都市の半分を吹き飛ばしてしまった事件も……いや、この話はいいか」

「……」

その話、超恐いんですけど。なに、暴発して大都市破壊とか……そんなの天災レベルじゃん？

「まあ、レイの魔眼については危なくないから、鑑定を無理に使い続けたとしても大丈夫だ」

「レイの魔眼が安全なもので安心したわ」
「ぼ、僕も……」
自分も心配が減って良かったよ。
「次は無属性魔法と属性魔法について簡単な説明だけしておく」
「はい」
おお、次は魔法かっ!!
楽しみだな！
「無属性魔法と属性魔法とかは子供には難しいから今は簡単に説明するが、レイが大きくなったら学校で教わるだろう。今日はまず、基本的な魔法の実演と練習方法だな」
「うん！」
「レイには魔眼があるから無属性魔法などの上達は早いかもしれないな。貴族や冒険者などの子供は、親が魔法を使えるのもあるから、早い家では3歳から教え始めて5歳になる頃に1つ魔法を覚える位が普通だろう。優秀な子供なら4歳の頃には1つ魔法を覚える位だな」
「え……？」
覚える数が少なくないか？

自分は既に何個も覚えているとは言えないじゃないか。前世の記憶があるのもデカいけど、もしかして魔眼はすごいチートなんじゃないだろうか？
ちょっと嬉しいな。
「まず俺が実演するから魔眼で見ると良いだろう」
「はい！」
「最初が一番難しいが無属性魔法のボールという基本の魔法を覚えてもらう。やり方は手のひらに魔力を丸く固めるイメージをする。魔眼が無い人は魔力が見えないし、感じないからイメージも出来ずに必ず苦労するが、レイの場合は魔力が見えるなら楽に出来るかもしれないな。レイは俺が出している丸い魔力が見えるか？」
魔眼で父親の手のひらを見ると、自分が作るボールよりも高密度で綺麗なボールが出来ていた。魔力操作の違いなのか、同じボールでも全然別物の魔法みたいだった。
こういう差を感じると、基礎は必要だなと実感する。ゲームでいうレベルみたいなものだから応用力が高いはずだ。
「見えるよ～」
「流石は魔眼だな。次は属性魔法を付与……まぁ、加える事だな。レイの属性は雷だよな？」

「うん。なんで分かるの？」
「属性は髪の色に反映される事がほとんどだから、髪の毛や瞳の色で大体分かるぞ。中には特殊なタイプで、髪の毛と瞳が違う色だったり、髪の色を変えている人もいるから、必ずではないけどな」
「そうなんだ」
髪の毛の色を変えている人もいるのか……。
「あと俺やレイの使う雷属性はこっちの地域ではレアな属性で使う人数が少ないから、参考になる情報が少ない上に雷属性はスキル取得が特に難しいんだ」
「レア属性だから難しいの？」
「いや、属性付与する為には、雷をイメージしなくてはいけないが、レイは雷を見たことがないだろう？」
「うん。見たこと無い」
前世で散々雷の実験などを見たりしていたとは言えないからな。
「こっちの地域は雷が少なくてな。実際に雷を見た事がある人なんてほとんどいない。それもあって雷のイメージをするのはかなり難しいから取得するのが大変なんだ」
そうか、地域により火とか水に比べて雷は見る機会が少ないのか。そう言うと父親の手

のひらのボールが、バチバチ音をたてて光りだした。まるでプラズマが出来てるような感じで凄いとは思うのだが、それよりも……。
「お父さん、眩しい!!」
「ああ、悪い」
そう言うと父親の雷属性を付与したボールは、急に電球位の明るさまで下がっていた。
「属性魔法の周りを更に魔力で覆うと何故か光と音が抑えられる。雷属性を人前で使う時はこれを出来てからが良いかもな」
目潰しかと思ったよ!!
でもこの光や音を消す技術は他の魔法にも使えそうだな。
「そして、本来はこれを標的にぶつけるが、庭でやると大きな穴が空いて危ないから、今日はこれで終わりだ。これが無属性魔法に属雷性付与した属性魔法のサンダーボールだよ」
そう言うと手のひらにあったサンダーボールは霧散した。
「レイにはまずはボールの取得を頑張ってもらう。それが出来たら次は属性付与だな。ボールは魔力を泥団子のように固く丸めるようにしてごらん。分からなければお父さんかお母さんに聞けばいいから」

「うん！　分かった!!」
もうボールは取得していますとは言えないので、後日出来たフリをするか……。
これからも自分は隠れて魔法の練習をするのが決まったのだった……。

現在、自分は生活環境を改善する為、とある魔法を取得する練習をしていた。
それは、殺虫魔法である。
この前お母さんに殺虫魔法があるかを聞いてみたが、そんな魔法は聞いたことがないと言われてしまった。
自分としては虫がいっぱい徘徊している家の中で寝たり食事をするのはストレスでしか無かった。最初は慣れるかなと思ったけど、前世での記憶が長いせいか虫に慣れるのは難しそうだった。
それにしても、この世界に殺虫という概念は無いのだろうか？
そもそもこの世界には魔法が普及しているからなのかは謎だけど、科学が発展していないんだよな。殺虫剤の成分なんて知らないから科学的なイメージで殺虫魔法を取得するのは……。
そう言えばクリーンは細菌を殺してるみたいだけど、科学を知らないお母さんが使えて

いたし自分もイメージだけで使えるようになっていたな。それならクリーンの対象を虫に置き換えれば殺虫出来るのかな？
しかし、虫をイメージするって気持ち悪いな……。
いやいや、快適な生活環境を整える為だから仕方ない。
自分はそれから毎日、庭に出て嫌いな虫を観察してはイメージ力を付けていった。
「レイはなにしてるにゃ？」
「じめんばかりみてないであそぼうぜ」
「虫を観察してるんだよ」
「むしってなんにゃ？」
「むし？」
「虫が分からないか……」
自分はブラットとエレナに土の中にいる虫をハンドを使い、掘り起こして見せてみる。
この世界は何故かは分からないが、虫とかは前世の地球に凄く似ていた。竜がいるようなファンタジー世界なのにGとかがいるのだ。
Gは世界から殲滅したいな……。
「これが虫だよ」

「にゃ、うねうねしてきもちわるいにゃ」
「おれはへいきだな」
そう言うとブラットは普通に虫を直接掴んでいた。
「うわ、よく触れるな」
「それでむしをさがしてなにしてるんだ？」
「その虫を倒す魔法を考えてるんだよ」
「なんでだ？」
「何でって気持ち悪いからだよ」
「つぶせばはやいだろ」
確かに、ブラットの言うとおり虫は直接倒した方が早いかもしれない。しかし……。
「その虫はのんびりしてるけど、速い奴だったり大量にいたら難しいだろ？」
「……そうだな」
「そういえばママがむしをまほーでたおしていたにゃ」
「えっ？　本当に？」
エリーさんは殺虫魔法を使えるのか？
「つめたくして、パラパラにしていたにゃ」

「ああ、なるほど」
エリーさんはエレナと同じ髪色だから、きっと氷属性なんだろう。多分だがエリーさんは虫を凍らせて殺しているのだろうと予測出来た……。
しかし、自分には氷属性が使えないから、無理なやり方なんだよな……。
何日か虫を調べては、虫を殺すイメージでひたすら魔力を込めるという作業を繰り返していた。
その努力もあってインセクティサイドという謎魔法を取得する事が出来た。
この魔法は、魔眼にしか見えない霧が散布されるのだが、人や動物には無味無臭で反応すらしないのだが、虫にだけ効果があった。しかも、魔力を大量に込めると広範囲かつ高濃度らしくてGですら瞬殺する神魔法だった。
これで自分は菌と虫に対する特攻魔法を手に入れたことになる。
そして、インセクティサイドを家中に散布した次の朝、お母さんの悲鳴で目が覚めたので駆けつけてみると、台所周辺の床に大量のGや小さな虫の死骸が散乱している場面に遭遇した。
その後、お母さんがエリーさんを呼び出して瞬間冷凍したのを袋に掃き集めていた。お母さん達も理由は分からないが、虫の死骸を放置してはいけないという感覚があるらしい。

今度は死骸を処理する魔法が必要なのか？

自分の生活環境を改善する為の果てしない戦いは、まだまだ続くのだった。

自分が3歳になってからしばらくしたら、自分にも可愛い妹が生まれたのだった。

妹の名前はフローラといい、母親にそっくりな青い髪に青い瞳をしており、属性は水だった。妹の顔は生まれたばかりなのもあり、お猿っぽいけど、きっと母親に似て美人になるだろう。

モロットは小さい町なので、フローラと同学年の子は数人しかいなかった。自分の場合は幼なじみがブラットとエレナだが、同学年はもう少しいるらしいが見たことは無い。

最近、母親のことをお母さん、父親をお父さんと呼ぶようになるのも違和感が無くなっており、最初の頃のように両親が他人のようには感じなくなっていた。身体と精神が馴染んできたのだろうか？

だからと言って、精神が肉体に引っ張られる事はなかったが、一応は子供っぽい演技をしているので、演技に引っ張られる感じはあった。あと、3年間ずっとお母さんを見てきて思ったのだが、子育ては初めてだったから良いとしても、家事全般が得意では無さそう

だった。天然のおっとりしてる感じだけど怒らせてはいけない気がする。

来年からはお母さんの家事手伝いをして良いとお父さんから言われてるので、今年は妹の面倒を見ようと思っている。

まずは妹に嫌われないように頑張ろう。

そういえば自分の見た目を3歳にして初めて知ったのだが、髪の色はお父さんと同じ金色で、瞳が右が黒で左が金色。自分で言うのもなんだけど見た目は良いほうかもしれない。

ナルシストではない筈だが、かなり顔は整っている気はする。

しかし、魔眼である右目は黒い瞳と言われていたが、黒というよりは灰色でぱっと見では失明してるように見えていた。そして魔眼を使うと瞳に謎の魔法陣みたいなものが浮かび上がるのだが、これはやはり魔眼でないと見えないものだった。

鑑定をする度に瞳に魔法陣が浮かび上がっているのが普通の人に分かってしまうと、毎回魔眼を使っているのがバレてしまうので良かったなと思った。他の魔眼使いがどうか分からないけど、なんかゲームの敵キャラで出てきそうな感じだった。お母さんからは眼帯でもする？　と言われたが、全力で拒否した。

前世の悪い病気が発症してしまうからだ。

最近、親公認になった魔眼、魔力操作、鑑定を頑張りながら体力作りも頑張っている。

お父さんの話では外に出るには戦えなくとも逃げるために最低限の体力作りが必須になるらしい。どうも自分の体力は平均的に見ても低いらしく、両親からもいろいろアドバイスを受けているのだが、あまり成果は良くない。

前世で運動したことがほとんど無かったから、精神的にかなりしんどいし、もしかしたら身体の使い方が前世の記憶に引っ張られて悪いのかもしれない。

可能ならば身体強化などが出来ないかと考えているのだが、魔力が血管を流れている感じだけど、身体強化だと筋肉か骨を強化するイメージだろうか？　とかいろいろ考えはしたが成長期に余計な強化をして背が低くなったりしたら最悪だから未だに試せてはいない。

だから今はアイデアだけを考えて、成長したらいろいろ試してみようと思っている。

あと最近、魔力操作を練習している一環で、ボックスを活用出来ないか考えている。第一に試したいのが建築物などの型枠に使用する事は出来ないかを考えている。

魔眼で魔力を確認しながらイメージを鮮明にすれば出来そうではあるがまだ出来ていない。

型枠が作れたら建築、土木、料理と活用法は無限であると思う。

無属性魔法の説明を聞いてから魔力操作で試行錯誤しながらいろいろな事に挑戦していたら、魔力自体は形がないものだけど、魔力操作を使えば固めたりも変形も自由なので、かなり万能なものだった。

しかし魔力を使った無属性魔法は一般的には使い道の薄いものとして認識されており、属性魔法を使う手前に覚えるだけのものとされていた。

魔眼のように魔力が見えるか、感覚で分かる天才肌の人しか分からないのと魔力操作でかなり練習しないと実用レベルまでいかない。見えないものに努力するなら目に見え、しかも活用し易い属性魔法が普及するのは当然だろう。

それなら自分の持って生まれたアドバンテージは生かすべきだろう。

それに魔眼保有者達も、他の人に感知されづらい無属性魔法の利点をわざわざ教える必要はないから認知度も低いのかもしれない。

でも元々争いの少ない世界で育った自分としては護身と生活改善に力を入れたいと思う。少し冒険者も憧れるけど、ネットゲームの時もプレイヤースキルが無くてよく死んでいたしな……。

多分、今世も戦う才能は無い気がする。

続きは、5月20日発売のファンタジア文庫で！

©FairyP, Makihitsuji 2020